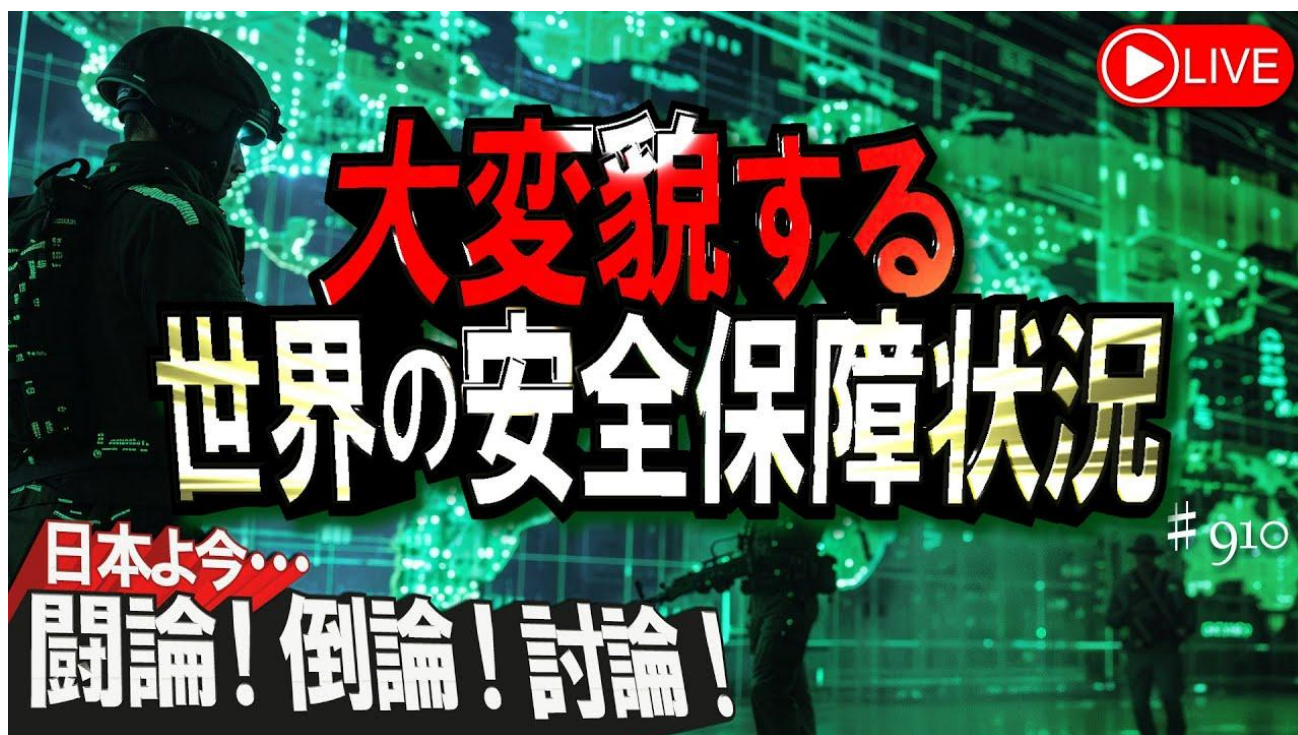




日本よ、今、討論！討論！討論！ 2025第910回 大変貌する世界の安全保障状況

R7/5/15

パネリスト：

マックス・フォン・シュラー小林（元米海兵隊・歴史研究家）
用田和仁（元陸上自衛隊西部方面総監 陸将）
矢野一樹（元海上自衛隊潜水艦隊司令官 海将）
矢野義昭（元陸上自衛隊小平学校副校長 陸将補）
山口敬之（ジャーナリスト）
山下裕貴（元陸上自衛隊中部方面総監 陸将）
ロバート・D・エルドリッチ（エルドリッチ研究所代表）※リモート出演

司会：水島総

水島「皆さん、今日は」

一同「(礼)」

水島「討論！討論！討論！2025第909回目の討論となります。今日は、特に安全保障問題『大変貌する世界の安全保障状況』といった形で、勿論、日本も関係するんですけど、世界の安全保障状況、或いは、その姿勢とか態勢自体が、全て根本から変わりつつあるんじゃないかという意味で、この安全保障について、ちょっと焦点を当てて、皆さんと議論してみたいと思います。

今日は、皆さん、ご存じのように5月15日は沖縄が一応、本土復帰というか返還されたということですけども、つい4年前ぐらいまで、私達も毎年、沖縄に出かけて日の丸行進

というのを、ある公園から国際通りをずうっと通って、日の丸を掲げて歩く活動をやってきました。その当時から沖縄の国際通り、まあ、観光客とか外人さんとか沢山、居る所ですけども、日の丸の旗が全く1本も無いと。ただ、あの頃、こういうことを始めて冷たい雰囲気でAWAY感がいっぱいだったんですけど、でも、その中にも国際通りのお店から突然、飛び出して来て飲み物を飲んで下さいとか、そういうことに励まされながら、色んなことで声をかけてくれる人も、何人かいました。

返還当時は沖縄が日の丸で埋まったんですよ。日の丸だらけになったと。ただ、これが色々な左翼運動の結果もあるんでしょうけども、本当に沖縄の県民が日本に戻るんだ、我々が祖国に戻るんだといったことが、年毎に変わっていく、イメージと違うものがあるって、日の丸1本も無い状態。恐らく今年もそういう形になっているんじゃないかと思います。

以前、ここに出演されたルバング島から戻られた小野田少尉が、日本に戻られた時は浦島太郎みたいで、自分は日本に戻って参りましたと、こういう形で敬礼をして戻って来たけれども、戻って来たら此は如何にと、自分のイメージした日本ではなくなっていたと。全て政府から送られた1千万の補償金といったものを全額、靖国神社に寄付してブラジルに移られた。

そのあと向こうで成功なさって、また日本に戻られて、子供達の為の小野田自然塾っていうのをなさったけど、あの当時のマスメディアの扱いや色んなものを考えると、やっぱり戦後の日本の在り方。戦後80年が既に関経しましたが、日本の在り方は、ちょっと離れているルバング島に居た方が戻った時に感じたものは、やっぱり戦前の日本と、あまりにも、かけ離れたものになっていたということじゃないかなあと思います。

そういう意味でも、今、戦後80年、そして昭和から100年、節目の年と言われているんですけど、この世界の軍事情勢とか安全保障状況、ウクライナ、或いはイスラエル、パレスチナ、或いはサウジ、イラン、或いはパキスタンとインド、中国と日本の問題、こういったものを含めて話してみたいと思います。

では、ちょっと長くなりましたけども、出席の皆さんをご紹介します。まず元陸上自衛隊小平学校副校長、陸将補の矢野義昭さんです。宜しくお願いします」

矢野（義）「宜しくお願いします」

水島「元陸上自衛隊西部方面総監、陸将の用田和仁さんです。宜しくお願いします」

用田「宜しくお願いします」

水島「元海上自衛隊潜水艦隊司令官、海将の矢野一樹さんです。宜しくお願いします」

矢野（一）「宜しくお願いします」

水島「元アメリカ海兵隊、歴史研究家のマックス・フォン・シュラー小林さんです。宜しくお願いします」

シュラー「お願いします」

水島「元陸上自衛隊中部方面総監、陸将の山下裕貴さんです。宜しくお願いします」

山下「はい。宜しくお願いします」

水島「ジャーナリストの山口敬之さんです。宜しくお願いします」

山口「(礼)」

水島「そして今日はリモート出演ですね。ズーム出演だと思いますけども、エルドリッチ研究所代表のロバート・エルドリッチさんです。宜しくお願いします」

エルドリッチ「宜しくお願いします」

水島「はい。さっき、みんなで話していたんですけど、エルドリッチさんの服が中々格好いいなあと、お似合いだと話していたんですけどね。今、エルドリッチさんはどちらです

か」

エルドリッチ「今、ハワイに来ています」

水島「ハワイですね」

エルドリッチ「はい。でも仕事は、ちゃんとしていますよ（笑）」

一同「（笑）」

水島「いやいや、それは本当の働き者だっていうことを知っていますので、はい。今日も宜しくお願いします。それでは、さっきも言いましたように、ウクライナからイスラエル、パレスチナ、色んな所で紛争というか、こういうのが起こっています。パキスタンとインドもありました。今、中国が、まあ、これは常套手段ですけど、ヘリコプターの尖閣諸島上空の領空侵犯ということが起こっています。

でも私が自分で言うと、あれですけど、実は、我々は、これまで34回、尖閣諸島の漁業活動と称する、結果としては実効支配を示すことになる。私も20回ぐらい行っていて、12年ぐらい前に中国人が魚釣島へ上陸した4日後に、私は泳いで尖閣諸島に上陸しましたけども、こういう時代から見て、もう政府の、まあ、はっきり言うと、頑張っている、頑張っているって言いましたけども、私達はずっと長く、つい最近までのそういう歴史を見ていますと、やはり事なかれ主義というか事を荒立てていないという形で、所謂、サラミ戦法って言うんですかね、薄皮を1枚1枚、剥がすように、どんどん侵攻して来ると、こういうことが実際に起こってしまっているというような状態であります。

こういう中で皆さんが今、世界、或いは日本でも構いません。それぞれの見方のお話を戴けると思ってしまして、一人ずつ御意見の表明を戴きたいと思います。じゃあ、矢野

（義）さんから宜しくをお願いします」

矢野（義）「はい。バランス・オブ・パワーという点で言うと、冷戦崩壊直後から、もう大きく変わってしまっていると。冷戦崩壊した直後ぐらいは、例えば日米欧対中露を合わせたGDPとか軍事費の比較で言うと、経済規模は11倍ぐらい、軍事費で5倍ぐらいの格差があったんですが、それが、ちょっとデータが無いんですが4～5年前の時点でも既に軍事費に於いては、もう1.数倍ぐらい。

それからGDPでも、もう4.5倍から5倍ぐらい迄、格差が縮まっているということで、まあ、言ってみれば力関係で言うと、西側、或いは自由圏と言っているんですけど、日米欧対中露という力関係は大きく変わって来ているということですね。特に変化しているのは核のバランスでして、これは以前からお話していますけど、中国とロシア、それから北朝鮮迄、今、戦略的パートナーシップ関係、或いは同盟関係にあって、その戦力と核戦力と、それからアメリカの核の比較をすると、例えば戦略核でも2対1ぐらい、それから戦術核は、一方的に中国がINF条約で抑制されていなかったものですから急激に増やして、特に日本近海、西太平洋では圧倒的に有利になって数十倍の格差があると。

日本に向けられている核弾頭の数自体も細部は判りませんが、少なくとも運搬手段としては、これも集計の仕方がありますが、2千発ぐらいは持っているだろうと」

水島「ああ、そうですか。う～ん」

矢野（義）「言われています」

水島「前は400発とか言っていましたけども、随分ですね…」

矢野（義）「ええ。弾頭も今、年間100発ずつ増えていまして…」

水島「ああ～」

矢野（義）「既に600ぐらいになっているんですね」

水島「なるほどね」

矢野（義）「これもアメリカの見方の上では、もう2030年には1千発、35年頃には、

1500発ということで、現在の米露の水準にほぼ並ぶということは言われています」

水島「なるほど」

矢野（義）「それから北朝鮮も増産しているということで、弾頭も中国、ロシア、北ともに極超音速、軌道型の兵器に核を搭載するという能力を持っていますから、そういう点では圧倒的に有利になっている。

それから戦術核についても、これは元々ソ連時代からそうですが、長大な陸地国境を守る為に、ソ連、ロシアは戦術核を非常に重視してきているんですが、今でも予備弾頭を入れると7千数百発あって、アメリカの方は正確な数が出ていませんけれども数百から、せいぜい500発ぐらいと、これも数十倍の差があるということですね。ですから、核戦力では各レベルで圧倒的に、アメリカは劣勢になってしまっている」と

水島「うん」

矢野（義）「それから、その為に核の傘が実質的に信頼性を失っていると」

水島「はい」

矢野（義）「機能しないと言っていいと。それから通常戦力についても、特に艦艇の数で言うと、既に中国が圧倒していて、これはトン数でもそうですけれども、一番、問題は建艦速度でして、以前は4対1ぐらいって言うていたんですが、つい最近、直接、アメリカへ行って聞いた人の話では、中国は1日に3隻ぐらいを建造できる能力があると。アメリカは年間で6隻ぐらいしかないと。数百倍の差があるということを書いていてですね…

水島「それは凄いですよね。はい」

矢野（義）「今、日本とか韓国に建造を依頼するというような状況まで追い込まれていると。その背景としては、中国がWTO加盟以降、急激に低賃金労働を使って独裁体制下で、経済を急成長させ、それ以上の速度で、2015年頃まで二桁成長してきた訳ですけれども30年で30倍以上にはなっている。他方のアメリカは、製造業がどんどん空洞化して、その多くの技術とか投資、それから企業自体も中国へ移転したと。

それで軍需産業まで空洞化してしまって、艦艇の建造能力も非常に衰えている。それから兵器の開発や調達についても、非常に問題があると。米海軍の大佐が最近、告発の論文を書いているんですけれども、国防総省に装備のテストをやる、それから評価をする部門があるんですけれども、その部門が軍需産業と癒着してしまって、その兵器の本当の客観的な徹底したテストをやらずに、非常に有利な条件で、しっかり準備した状況でテストをして、それで合格を出してしまっている」

水島「うん」

矢野（義）「その辺がF35とか、それから一番問題は、ミサイル防衛システムですね」

水島「はい」

矢野（義）「例えば、スタンダード・ミサイルとかPAC3とか日本も入れていますけど、特にスタンダード・ミサイルやシャルルは、ICBMの迎撃って言うことが言われている訳ですが、今、アメリカはゴールデンドームと言って、主旨は米本土の対ミサイル防衛ですね。これに力を入れようとしているんですけれども、実はその骨幹戦力であるミサイル防衛システム自体が、信頼性の無い兵器だということがアメリカ軍内で暴露されていると」

水島「うん」

矢野（義）「日本も大規模にそういったイージスとかPAC3も入れているんですけれども、実はアメリカの兵器体系自体が、これはウクライナでも出ているんですが、所謂、売れる兵器を造ると。複雑高度で高価なものを造ってしまって、量産も効かないし、備蓄出来ない。それから戦場へ出した時に非常に操作が辛くて、一旦、壊れると、整備も中々

出来ない」と

水島「うん」

矢野（義）「こういう兵器体系になってしまっていると。それに対してロシアの方は、単一の兵器体系で、しかも簡素で安価で量産が利いて整備も不用意だと。だから稼働率も全然、違うと。それから、更にNATOは非常に多種多様な兵器体系を入れているものですから、例えば155ミリ砲を使っても、同じ口径の砲でも、同じNATO基準で造っているにも拘らず、微妙に砲弾が違ふもんですから、他の国の方で砲弾を撃つと、約半数が不発したとか、或いは不発弾になるということも言われていて…」

水島「ああ～、そんなことが起きているんだ」

矢野（義）「整備体系も非常に問題になっています。補給も」

水島「ねえ」

矢野（義）「そういう色んな問題点が今、噴出していて、日本人が思っている程、アメリカの兵器体系というものに信頼性はおけないと」

水島「なるほどねえ」

矢野（義）「それで、特に今、その復活に力を入れているのが艦艇と核ですけども、核インフラですね。これは、特に核についても運搬手段を含めて、1980年代、70年代の技術を基本にしていて改良はしているんですけども、そのシステムとしては殆ど劣化しているという状況です。これを取り戻すのに少なくとも、あと10年ぐらひはかかると」

水島「うん」

矢野（義）「で…」

水島「10年」

矢野（義）「はい。前のトランプ政権の時に一旦、2026年以降の近代化を計画したんですけども、予算不足等で遅れて、バイデン政権になって、更に遅れて、今の計画では、もう36年以降の近代化と」

水島「なるほど」

矢野（義）「それまでは現用のものを、寿命延長で使うという状況です。ですから、戦力バランス上も劣勢になっているだけじゃなくて、将来の核インフラの整備ということを見ても、このアメリカの核の傘っていうのは当面、期待できないと」

水島「なるほどね」

矢野（義）「この状況が最低10年は続くという。更に通常戦力も、例えばF35もデータの問題も言いましたけども、非常に試験段階からトラブルが多くて信頼性が低いということもあり、通常戦力、特に海空、それから陸上戦闘についても、これは別の話になるんですけど、ウクライナの戦場では長射程の精密誘導兵器というものが飛躍的に進歩して、情報については、もう数十キロ、数百キロ彼方からグローバルに昼夜天候に構わず精密に取れるということで、どちらが、より長射程の精密誘導の兵器を持ち、そして弾薬やミサイルを持っているかによって決まるんですが、それがロシアが大体、ウクライナの6倍から10倍ぐらひあると言われていて、それで圧倒的にウクライナ側が劣勢になって大量の兵器と兵員の損耗が出ている」

水島「うん」

矢野（義）「兵員についても、累積で100万人近くの戦死者が出ていると」

水島「ああ、70って言っていたのが…」

矢野（義）「ええ、未だ増えています」

水島「もう近く、はい」

矢野（義）「更に増えています」

水島「はい」

矢野（義）「ロシア側も十数万は出ているとは思いますが、依然として、7倍近い格差が出ている。この状況が何故、起こったのかって言うと、さっき言った兵器の体系の問題と、それからロシア側はソ連時代からのインフラをそのまま維持して、且つ改良して、もう2014～5年から将来のNATOとの戦いに備えて、備蓄もして、最新兵器を開発し、そして増産体制をつくっていたんですね」

水島「うん」

矢野（義）「だから緊急増産能力もNATOの見積もりの3倍ぐらいあって、備蓄量も倍ぐらいあるとか、そういうような、要するにロシアの潜在戦力に対する過小評価っていうのがあったと。それが、いざ開戦して見ると表に出て来て、今言ったような状況になっていると」

水島「なるほどね」

矢野（義）「これを回復する余地が無い訳です。アメリカ自体が今、連邦で36兆ドルの累積赤字で、毎年1兆ドルの返済に充てなきゃいけないという状況で、今、1兆ドルを国防費に注ぎ込んでいるんですが、インフレ率を入れると実質、減額な訳です。もう、この辺りがアメリカの国防費の限界でして、それを補う為には、特に中国に対抗していく為には、どうしても同盟国の再編、軍備強化が必要だと。

それで、さっき言った力のバランスの変化が起こった最大の理由は、日本と欧州が殆ど、冷戦崩壊以降、真面目な防衛努力をやって来なかったと。防衛費も据え置き、特に日本は1%枠と酷いんですけれども。それから兵員も殆ど増やしていない。装備体系も入れ替わっていないということで、もう、どんどん劣化が進んでいて、格差がどんどん開いている訳ですよ」

水島「うん」

矢野（義）「これをアメリカが一国で何とか補って来たけど、アメリカも財政破綻で限界だ」

水島「うん」

矢野（義）「そこで、結局、アメリカが選択と集中をせざるを得ない。その中で選んだのが一つは国土防衛です。その為にゴールドドームというミサイル防衛システム、特にICBM対象、極超音速ミサイル対象の体系をつくらうとした。しかし、それも、さっき言ったようなことで、実用化は莫大な資金と技術力が要ると。

その間、最大の脅威になるのが中国だと。その為にアメリカは今、グローバルな展開をしている戦力を台湾海峡正面に集中しようとしている。その時の前線国家の中核になるのが実は日本ですね。日本が崩れると、朝鮮半島も台湾海峡も平和安定を維持できないと。だから日本に2%じゃなくて3%から5%でも、もっと増やして真面目な防衛努力をやれと。

肩を並べて戦える軍にしてくれと。もう日米安保も双務性に持って行って、日本は自立防衛しなきゃ駄目だという、アメリカ側の要求がある訳です。それに対して、日本側の現在の政府とかの対応が、あまりにも危機に対しての自覚が欠けている。それから日本の役割についての自覚が無くて出遅れていると。一番の問題は、その戦略を立てる為の基本になるサイクルが、全く機能していないってことです」

水島「うん」

矢野（義）「中枢の頭脳も無ければ、シンクタンクが無い。それから情報が無い。それから、実力集団としての自衛隊が、予備役というか予備自衛官合わせて30万しか居ない。これが世界平均の三分の一ですよ」

水島「うん」

矢野（義）「それから弾薬だって無い。１０倍に増やそうとしても１０年かかる。それからミサイルの増産能力も全く無い。それから、国産の装備を自ら造り上げるだけの、防衛力の技術基盤も無い。それから、それを普及していく、分析する為のシンクタンクや大学の教育もされていない。一番、根本は日本人の国防意識、愛国心を育てる様な初等、中等教育が全くされていない」

水島「うん」

矢野（義）「だから、いざとなった時に国の為に戦うというのは僅か１３．２％、ダントツの世界最低ですよ」

水島「うん」

矢野（義）「それから、どうしていいかわからないというのが、これも過半数で世界最大」

水島「うん」

矢野（義）「つまり教えざるの罪なんですね」

水島「うん」

矢野（義）「これで日本を守れと言っても守れない。だから取り敢えず最小限の核抑止力を持って、まずは日本に対して手出しをさせないという体制をつくると」

水島「うん」

矢野（義）「それから尖閣にも、無人島で人を置いておかずに何か自衛隊を常駐配備するとか、隙をつくらない、グレーゾーンにも備えられる体制を早急につくらなきゃ駄目だというのが私の結論です。この本の中でもそういうことを書いているんですけど」

水島「ああ、なるほどね。はい」

矢野（義）「まあ、ちょっと長くなりました」

水島「はい。有難うございます。長くなるって言うても、トータルな意味でのお話をお聞かせ戴いたと思うんですけど、それは中国もロシアも、みんな、知っていることですね」

矢野（義）「はい」

水島「日本の国民は知らないけれども、相手側は、今、言った分析の内容をしっかりと知っている。日本の状態っていうのが、こういうことだと判っているということですね」

矢野（義）「だから真面な外交も出来ないし、国益を守れないから、どんどん地盤沈下を起こしているというのが日本の現状です」

水島「ほんとですね。ここだけを見ると、馬鹿にされるのは無理も無いですよ。ほんと残念で悔しいけど、阿呆かっていう感じですね（失笑）。こういう厳しい状況を我々はしっかり把握した上で考えなきゃいけない。では用田さん、お願いします」

用田「はい。厳しい状況に輪をかけて言えば、我々の基本的な考え方、要するに日本っていうのは前から言われているように、重心が薄いという薄皮一枚ですよ」

水島「うん」

用田「ウクライナの戦争というのは、基本的には非常に重心のあるもので、戦っているのは東側の四分の一の所で戦っている。尚且つ非常に制限した戦い方をしています。お互いに制限戦ですから」

水島「はい」

用田「それで基本的に後ろの…いっぺんには全部、全滅をされないという体制にある訳ですね。日本で何が一番、間違っているかと言うと、沖縄、九州、本州、三沢、北海道と順繰りに下がっていくと思っている訳ですよ」

水島「うん」

用田「ところが日本は、中国大陸から見たら横たわっているんですよ」

水島「うん」

用田「だから逃げ場がないんです。だから全重心で同時に打撃をされる」

水島「うん」

用田「そして兵站とか弾薬庫だとか、そういう所は今、真っ先にやられるじゃないですか。残念ながら、やられるんです」

水島「うん」

用田「あまり声を大きくして言いたくないけども」

水島「いや、言いたいと思います」

用田「結局、それは今迄、手当も何もして来なかったし、しなかったし、航空自衛隊の滑走路だって、まあ、民間を含めれば100以上あるんだけど、弾薬、燃料はありますかって言ったら、全く何も無い訳ですよ」

水島「うん」

用田「そういう状況の中で基本的に守れますかって、今、言ったように前方も後方も無いのが日本なんだと。やられるのは全重心同時ですよ」

水島「はい」

用田「尚且つ、前から申し上げている通り、中国も分かっている通り、日本は薄皮一枚で守らなきゃいかんという国土防衛ですから、下がれない訳ですよ。けども、アメリカにとって、ここは緩衝地帯ですよ」

水島「うん」

用田「だから、もっと言えば、大坂冬の陣の真田丸ですよ」

水島「うん」

用田「前の方に突出した部分ですよ。アメリカにとっては大切です」

水島「うん」

用田「でも、大切けども、最後まで守れるなんて、始めから考えちゃいない訳です。アメリカの海軍力の強いのは、西太平洋で戦うのが一番、いい訳です。海軍力を全部、生かす為にはですね。そういう意味では、我々の基本認識からどうなるかっていうことをアメリカと、しっかり議論しなきゃいけない部分は正にそこです。先程、矢野（義）さんがおっしゃった通り、エルブリッジ・コルビー（Elbridge Colby）が言っているのは、日本は軍隊を持てと言っているんです。3倍とか言葉尻だけを捉えているけども、そうじゃなくて、所謂、自立した国防軍を持ってやればいいし、核のシェアリングをしてもいいよと」

水島「うん」

用田「まあ、シェアリングより自分で持たなきゃいかんですけどね」

水島「うん」

用田「だから彼はそういう話まで頭に持っていて、国家戦略をつくる中枢ですね。彼は前回、前方で戦う戦略をつくりましたが、今回二回目、日本も何もしなかったし、バイデンも何もしないというよりも、もう下がるということを決めてしまった訳ですね。だから、そういう意味では、残念ながら厳しい議論、本当の議論っていうものが為されていないということですね」

水島「そうですね」

用田「ちょっと話があれで申し訳ないですけども、前半と後半と、前座だけちょっとだけ言わせて戴きたいのは、せっかく制服の元自衛官の人が、ここに4人も居る訳ですよ。この4人というのは、ある意味、日本の国土防衛の主体です」

水島「うん」

用田「主体で、実は、昔、矢野（義）さんは歩兵、私は戦車。山下君が砲兵特科、こうい

う関係で、我々が偉そうに早く支援せんか、早く撃てと言っていた訳ですよ」

水島「うん」

用田「ところが南西防衛で一番大きな問題は、我々の常識の転換な訳ですよ。何故かと言うと、これからは山下君のところにある対艦ミサイル、これは陸海空でやりますけど、対艦ミサイル。それから部隊は違うけども電磁波を使う」

水島「うん」

用田「電波妨害だとか電子戦」

水島「うん」

用田「もう一つは防空ですね。これが今迄は支援戦力だったのが、主役ですよ」

水島「うん」

用田「これが意識の転換ということで、実は一番、初めに物凄く苦労した部分は、全てが転換するよということを、頭の切り替えが出来ない」

水島「うん…」

用田「そういう状況の中で、今回、その国土防衛っていうものの柱っていうのがつくられてきて、今、南西の防衛っていう事でやっている訳ですね。でも、それは水上艦を沈めるだけ。ところが潜っている奴が一番、やっかいで、矢野（一）君と一緒にアメリカの海軍にも行きましたけど、切り札は潜水艦だという訳ですよ。正にそうですよね。水上艦が居て水中の作戦、これは非常に未知の世界で私が喋ることは殆どありませんけども、水上と水中、これを抑えるものが基本的に南西の壁と言うか、南西の防衛の勝者ですよ」

水島「うん」

用田「それはアメリカがやってくれる訳じゃないです。頼まなくてもいい。頼まなくても自分がやれる体制だし、やらなきゃいかんのですよ」

水島「うん」

用田「アメリカのバイデンが、それを持ってこないからと言って文句を言っても始まらないので、日本はそれが出来るので…。でも潜水艦は、いつも矢野（義）さんも矢野（一）君が主張しているように、原子力潜水艦の攻撃型と核を持ったミサイル発射型の両方を持たなきゃいかんのですよ。

攻撃型を持たないと全く違う戦が出来ると。だから陸上自衛隊である矢野（義）さんが、この本を書いたっていう意味は物凄く大きいですけどね。だから、これとプラス機雷。機雷というものが一緒になって水上と水中、その機雷で南西に壁をつくる。何だかんだ言っても中国の弱みは南シナ海、東シナ海しか出口は無い訳ですよ」

水島「うん」

用田「だから、これを沈めるっていうことは、基本的に決定的な打撃力を与える」

水島「うん」

用田「やるぞと。お前、海洋国家でなくなるよねと」

水島「うん」

用田「ただ、これで出来ないのは、核の抑止までいかないんですよ」

水島「うん」

用田「船を沈めるぞと言っても、分かったと、俺はお前の所に核を撃ち込むからと言われたら手も足も出ない訳ですよ」

水島「うん」

用田「だから、どうしても、ここの議論は戦略核については、トランプはYESかNOか、どっちを言うか分からないけども、多分、EMPから戦術核のあたりのレベルまでなら、しっかり持たなきゃいけないということを政治家が認識をしなければいけない」

水島「はい」

用田「これは基本的に最初から使うと言っている訳じゃなくて、彼らがやればやりますよ。懲罰的と言いますか、報復的な抑止ですよ」

水島「うん」

用田「だから、そういうものを最初から使う訳じゃないですよ。やったらやる。我々も、それでやられる訳ですから、やる準備は出来ているからなという為の核戦力であるという認識を、やっぱり日本は、しっかり議論を深めないといけないんだろうなという風に思います」

水島「なるほど」

用田「だから、これが、つくり上げた防衛の骨幹で、核の部分は完全にスッポリ抜けとるところが痛手だと。船を沈めると言っただって、そこは止まらんと。でも、それは中国にとっては、決定的に二つの弾を持てる方が、影響力が大きいと」

水島「うん」

用田「その中で、この前も、ちょっと話をさせて戴きましたが、提案させて戴きたいのは、色んな種類のミサイル、所謂、その発射機というタイプを持たなきゃいけないと。その為には、ちょっと申し上げるけど、コンテナ船が何処からか撃って来るか判らんけども、中国は、これを持っている訳です」

水島「うん」

用田「だからロシアも、こういうコンテナ型のやつを持っている訳ですよ」

水島「そうみたいですなぁ」

用田「これでコカ・コーラとか書いてあって、何か判らんやつから飛んで来る訳ですよ」

水島「うん」

用田「こういうやつだとか、これはアメリカの小型船に、コンテナを積んでいる訳ですね。ということは機動性を持ってやるぞと、こういう世界になっている訳です。こういう風なのが日本にありますかと言ったら、これから、やっと出来るんですね。これは元々原画ですけども、カイマン（Caimen）。カイマン90は90トン積んでも、30ノット、40ノットで走ると。御覧の通り何が決定的に違うかという、岸壁に上陸するんですね」

水島「ああ〜」

用田「岸壁に上がるんです。これが南西諸島の島はサンゴ礁で囲まれていますからAM7とか、そういうやつは、ほぼ役に立たないと思った方がいいと思います」

水島「そうですね」

用田「島は港があるんです。5メートル掘ってあるんです。水路を造ったって小さな港は全部、5メートルの水路だと」

水島「うん」

用田「これは90トン、乗っけても喫水が2メートルか3メートルです」

水島「ほお」

用田「岸壁っていうのは、どんどん岸壁から上げていかなきゃいけない訳ですね。尚且つ災害派遣という時も逃げる人達は岸壁とか港に逃げるんですよ。私はそう思う。だから、それに対して、ここから、どんどん上がっておいでと。これはウォータージェットですから水深が浅い2〜3メートルの所でも遡上していく訳です。東北の大震災の時でも、これを造らなきゃいかんということを言っていましたけども、これが、やっと出来るようになりました」

水島「うん」

用田「言ってもいいのか知りませんが、JMUが、あのう…」

水島「報道されてましたね」

用田「はい」

水島「これね」

用田「これが、その形になる訳ですね。カイマン（高速揚陸艦）っていうね、やっと、これが出来たかなと。これにも、こういうコンテナ型のやつを積みば、アイデアですね」

水島「うん」

用田「コンテナ型のものを積みば、基本的に海の上でも縦横無尽に色んなことが出来るだろうし、数を持たなきゃいかんですよ。日本は直ぐ数をケチるから駄目ですけどね」

水島「うん」

用田「尚且つ列車とか載っけるとか、或いはトラックでもいいんです」

水島「うん」

用田「それに乗っけてウロチョロしている時に、逃げられる訳です。北朝鮮は列車に乗った、そういうミサイルを持っている訳ですよ」

水島「うんうん、そうですね」

用田「何故、日本は持たないのと。トンネルが、いっぱいある訳ですよ。そこに隠れる訳です」

水島「うんうん」

用田「因みにフーシ派がやられたって言ったじゃないですか」

水島「はい」

用田「アメリカの方が損害は大きいですよ」

水島「ああ、そうですか」

用田「結果的に金目から見たら」

水島「ああ、そうか」

用田「無人機を落とされるわ、F18は3機」

水島「うん」

用田「3機ですね」

水島「うん、うん」

用田「落ちてしまうわ、凄いダメージですよ」

水島「ああ、そうだったんですか」

用田「尚且つフーシのミサイルは、イスラエルに到達しましたよね」

水島「ええ、近くに」

用田「ということは、先程、矢野（義）さんがおっしゃったように、ミサイル・ディフェンスというのはどうなのという世界が、どうしても…」

水島「アイアンドームもね、何かね…」

用田「アイアンドームも破れる、前も破られていると言われていたんだけど、今回、破られるということが、はっきり判りましたね」

水島「そうですね」

用田「だから何を言っているかと言うと、陸のミサイルを持った部隊だとか、こういうコンテナとかを持った部隊は、基本的に隠れて逃げる事が出来るということです」

水島「うん」

用田「生存するということです」

水島「なるほどねえ」

用田「イラクが叩かれた時も、イラクは殆どやられなかったんですよ。50%いったかな、ってないよね。イラクのイスラエルに撃ち込んだスカットミサイルとか、そういう

やつは結構、あの砂漠の中で見つかっていないですよ。やられてない訳ですよ」

水島「ああ、そうですか」

用田「動くものは、一発で命中させることは中々難しい。中国に対しても同じですけどもね」

水島「なるほど」

用田「我々もそうですよ。だから考えようによってはアイデアを持てば、そういうものを日本で充満させて、いっぱい持つことが出来る訳ですよ」

水島「そうですね」

用田「それは核ミサイルとか、そういうやつを持つというものと、発射母体をしっかり持たなきゃいけないということと、一緒になる訳ですね」

水島「うん、そうかあ」

用田「ということで…」

水島「鉄道を残すのは意外とプラスの意味もあるんですね」

用田「鉄道はあるんですよ。鉄道、いや、鉄道はあるし」

水島「トンネルはあるしねえ」

用田「トンネルの中にあるし、道路もあるし、我々は山がちの地形の中で、隠れながら撃つことが出来ると」

水島「そうですね」

用田「北朝鮮に出来て、何故、日本に出来ないことがあるんだと」

水島「はい」

用田「ちょっと前座で時間を使ってしまって申し訳ないんですが、あと、ちょっと5分か6分に纏めて、まあ、纏めれるんかなあ、いつも、嘘を言いますからね」

水島「いや（苦笑）」

用田「これが今度は大きな目を見たやつです」

水島「はい」

用田「世界的な安全保障というものの根幹と言うか、ベースになっているやつで、何が変わるかと言うと、やっぱりトランプとプーチンが手を握ると。この青の世界ですね」

水島「うん」

用田「反グローバリスト、反グローバリズムというものが基本的に手を結ぶことになる訳ですね」

水島「はい」

用田「反グローバリズムを言っているのは、国家主権だとか文化とか伝統とか宗教だとか、それを尊重して国家として大切に繁栄していきましょうという。それがトランプについてはMAGAということで、それを基本的にやっている訳ですね。この茶色の部分が基本的にグローバリストで、今は何のことは無い、欧州の残存した現EUの政権と中国、一部南米、日本」

水島「うん」

用田「これが基本的にあって、私は、悪のトライアングルだと」

水島「それで枢軸国ですね」

用田「それで日本が一番悪いのは、無自覚な国家だということ」

水島「そうですね」

用田「欧州は今、分裂を始めている訳ですね。これはルペンだとかAFDだとかイギリスのナイジェル・ポール・ファラージ（Nigel Paul Farage）も頑張っている訳ですよ」

水島「はい」

用田「ルーマニアの選挙も、もう直ぐあります」

水島「うん」

用田「ハンガリーとかスロバキアは欧州では右派、極右って言っているけども真面な勢力ですよ」

水島「うん」

用田「そうするとロシアとの戦い方が終わって、NATOの性格も変わってしまう可能性はある訳ですよ。だから完全に欧州は分裂をしている訳です」

水島「うん」

用田「その中で、青の部分の右派って言われる人達が、ロシア、元々プーチンはそうだから。それからトランプと非常に相性が良い訳ですね。ところが気がついてみたら上に、こんなのが居たか（失笑）、シオニズムとユダヤロビー、これは山口さんが一番、詳しいんでしょうけど。このシオニスト、ユダヤロビーっていう奴が乗っかってて、いつまでも戦争を続けるんだと。ところが、この流れは、この1週間ぐらいで変わってましてね」

水島「そうですね」

用田「反ネタニヤフに変わっているんだらうと。それはマイケル・ウォルツ（Michael George Glen Waltz）がクビになった。これは基本的にネオコンですね。それからシリア、これも、いやいやトランプは今、トルコと話をしているからと」

水島「うん」

用田「イスラエルにとってはショックな訳ですよ。それから…」

水島「あれ、3回会議しましたよね」

用田「アメリカはハマスの人質、住民票を持っている、ああ、住民じゃなくて国民のあれを持っている人間ですね。その人質解放をイスラエルに言わないでやっちゃった」

水島「うん」

用田「それからフーシとの戦争をやめちゃったと。これも基本的にネタニヤフと違う動きを全部、始めている訳ですね」

水島「うん」

用田「だから、ここにきて多分、ユダヤロビーもネタニヤフは酷過ぎるということで、見切りをつけた可能性があるんだと」

水島「うん」

用田「そうすると、今迄の正念場というのはロシアとトランプ、これが鍛接にくっつくかどうかという話は、ウクライナとイランの話が楔になっている訳ですね。ところが、ウクライナについては今、話を始めたけれども、イランについてはどうかと言うと、二日前にプーチンがイランに行ってハメイニに会っているんですね」

水島「うん」

用田「これは相当、深い話をしているはずだと思います」

水島「うん」

用田「これは予断を許さないけども、イランについても、もしかしたら攻撃をしないという形になるかもしれん」

水島「うん」

用田「イスラエルを単独で攻撃するかもしれないが、ロシアにとってイランは決定的に大切です」

水島「うん」

用田「それはユーラシア大陸の外郭の防衛で、北朝鮮、イラン、そしてベラルーシ…」

水島「ああ、アゼルバイジャンですね」

用田「これが外郭ですね。そして中が強くというのがあると。その外郭の中のイランというのは、非常に大切な位置づけにあって、尚且つ、ご承知の通り南北回廊」

水島「うん」

用田「これはロシアが初めて南にインド洋に出て行く、本当に欲しい回廊ですよ」

水島「ムンバイまで鉄道をね」

用田「それがイランですよ。だからロシアは絶対に、イランが潰されたくないし、潰して貰ったら多分、プーチンとトランプの関係は破綻する可能性がありますね」

水島「うん」

用田「ウクライナについては、あまり詳しいことは言えませんが、基本的にゼレンスキーが会いたいなんて言ったって、そんなことは出来るはずがないので、お前は憲法違反や、自分のところの憲法に違反して会いに行くのかという世界ですね。だから、ここはウクライナがどうするかという話と、イランがどうするかという話にしては非常に大きいし、ただウクライナについては残念ながら決裂すると思います」

水島「うん」

用田「これは基本的にやるところまで徹底してやると。それは、あとで言いますけども、トランプとプーチンの米露2大国の新秩序で、世界の戦争は沈静化するかもしれない。それでトランプは、もう4つのことを目指している。これを頭から外してしまうと話が進まないんですけども、国内を大掃除していると。DSとグローバリスト、それから、伝統的な不介入、そして中立に戻ったMAGAのアメリカと強い自分の1極のアメリカ西半球をつくるという世界。

アメリカの核心的利益っていう言葉を言っていますから、中国と一緒にという世界ですけどね。それから軍事介入による英米一極支配の放棄と。これは大きいですね。平和の創造をやりたいというと、そうすると当然、海外の基地の削減と撤収をやると。

それから米露の修復で世界のグローバリズムを一掃して、大国による新世界秩序の構築ということで、中共は全部、倒すと。でも中国は違くと。これはトランプとプーチンは協調しながらも、米露の緊張状態は続くというのは多分、プーチンが言っているのは、西側からは何も期待しないと。

制裁は継続する、幻想は抱くな、一方、旧秩序は死に西側は衰退している。だから待っていると、西側は段々へこんでいくと。だから今、制裁をくらってもいいと。だからウクライナについては、今は欧州だとかウクライナはやめる気はありませんから、戦争継続ですから、それなら行くかという世界はあるし、今回のトルコでの会議でも、所謂、ケロググだとか、こういうのが居たら話が全然、纏まらないですよ。

だから取り敢えず、話は一回で纏まりはしないけども、トランプとプーチンが、いきなり手を結ぶというには未だ壁があるという世界だという風に思います。だからウクライナとイランの、これが無くなると、事態は一挙に変わると。それでも新世界秩序をアメリカとロシアが手を握るっていうことを嫌がる3つの勢力というのは、頭の何処かに置いておかなきゃいかんのは、世界の1極支配は諦めない軍事産業と、一体化したネオコンの暴走、それから欧州、ウクライナ、イスラエル、ネタニヤフの結託と」

水島「それと日本ですね。うん」

用田「これは30年越しの結託ですね。ロシアについても30年越し。それから大イスラエル構想についてもネタニヤフは30年越しですね。ネタニヤフは1996年から首相をやっているんですね。だから大イスラエル構想というのは、基本的にどちらも30年越しの構想ですね。そう簡単には諦めないというのが今の構図です。

それから言いたくはないけども、一極支配の根底にある米英の優越主義と例外主義と。俺達が一番だというのが、やっぱりどうしても、そこにあるのかなと。それからグローバリストによる世界秩序の破壊と構築。これは、ずっと続いている。一向に弱まる気配は無いという風に思っています。

だから反グローバリズムの親分である、トランプとプーチンへの反撃とかが厳しい訳ですね。それからアメリカとロシアの主導の世界秩序を拒絶する。そしてウクライナ中東から大規模長期化したあと、アジアへ飛び火すると。

あと一つだけ言わせて戴くと、トランプは強く国家主権を持った独立国を支援をすると。アジアは対中共の流れ、これは我々が立ち向かわなければいけない必然的な、どうしても敵になる訳ですけどね、アメリカがどう思うと。しかし、もう一つはネオコンの次なる戦争の流れが合流するということで、今のアメリカの国防長官もそうだし、どうしても、ネオコン、軍事産業を持ったところの勢力は極めて強いんですよね。軍人は、ほぼ根こそぎです。

そういう意味での中の流れが、アジアに流れて来る。戦争の流れっていうやつをよく仕分けしないと。踊らされてはいけないと。我々も自衛官だったですけども、元軍人は2027年には中国が侵攻する。或いは2030年にロシアはヨーロッパを侵攻する。ほんとかいと。そこは一回、考えてみる必要があるんじゃないかという風に思います。以上です」

水島「はい。有難うございます。今、お二人のお話の中で出たことで、一般の皆さん用にお聞きしたいんですが、超極音速ミサイル。アイアンドームにしろ、何にしろ、今の時点で迎撃ミサイルは、撃ち落とす力は無いですか」

用田「出来ないと思います。出来ないよね。出来る？」

山下「出来ます」

矢野（一）「出来ます」

水島「出来ますか」

矢野（義）「いやあ、それはですねえ…」

用田「いや、それはマッハなんぼで言えば…」

矢野（一）「ミサイル防衛というのは、根本的に違うんですよ。あれは弾道弾とかに向っている訳ですよ」

水島「うん」

矢野（一）「弾道弾だって、射程によって再突入速度が違って来る訳ですよ」

水島「うん」

矢野（一）「だから大陸間弾道弾なんていうのは迎撃不可能だっていうのは、再突入速度が物凄く大きいから、システムが反応する暇が無いんですよ」

水島「うん」

矢野（一）「だから中距離弾道弾ぐらいまでが、今のBMDの対応できる限界ですよ」

水島「うん」

矢野（一）「極超音速ミサイルというのは、それはマッハ5以上で突っ込んで来ると言いますが、マッハ5なんていうのは弾道弾の再突入速度に比べたら物凄く低いんですよ」

水島「うん。何かマッハ15ぐらいだっていう」

矢野（一）「ええ。ですから弾道弾というのは、マッハ15から20ぐらいのスピードで再突入してくる訳です。だから弾道弾と極超音速が違うというのは、極超音速は途中で軌道を変えることが出来る訳です。弾道弾のように放物線を描いて飛んで来る訳じゃない訳です」

水島「うん」

矢野（一）「そうすると、弾道弾の様に放物線を描いたら、未来位置は簡単に計算できますよ」

水島「うん」

矢野（一）「ところが途中で軌道を変えられたら、それに追従して高速のミサイルを撃つというのは非常に難しいですよ」

水島「はい、難しいよね」

矢野（一）「はい。但し、極超音速ミサイルと言っても、早い航空機のような飛翔体であることは間違いないですよ」

水島「まあ、人間がつくったね」

矢野（一）「そうすると、対空ミサイルでも条件さえ、きちっと整えば迎撃できるんですよ。例えば、今、アメリカのイーゼス艦が積んでいるSM6なんていうのは、ある程度の極超音速ミサイルには対応できるというだけの能力は持っている訳ですよ。ですから、いつに、そのミサイルは、どのような飛行形態をとってどれだけのスピードで突入して来るんだということによって、迎撃不能なのか迎撃できるのかというのが分かれるんですよ」

水島「なるほどね。想定的なもんだっていうことだね。だけでも極超音速ミサイルが前に色々やった時、小惑星がぶつかる」

用田「はい。あのう、オルシェ、オルシェニクか」

矢野（義）「オレシュニク」

用田「オレシュニクはマッハの11ですよ」

水島「11？」

用田「うん、マッハ11。だから基本的には、あれは迎撃できないとプーチンは言っていますよね」

水島「なるほど」

用田「だけど、それが基本的に警備をしながら、小宇宙を警備しながら撃つ訳ですから、今回のようにアイアンドームがあったとしても、そこをスポンッと抜かれる可能性はある訳ですね」

水島「なるほどねえ」

矢野（一）「アイアンドームだと、ある程度の中距離弾道弾の射程が長くて、再突入スピードが速ければ対応できないと思います」

水島「うん。なるほどね。はい。今、この極超音速っていうのがお話の中で出たんでね、一応、一般の皆さんに、こんなに難しいもんだっていうね…」

用田「弾道弾はマッハ20ぐらいで飛んできますからね」

水島「なるほどね」

用田「正に隕石と同じぐらいです」

水島「これ、今、言ったようにこれね。はい」

山下「再突入した、そこがマッハ20で、空気抵抗で段々速度が落ちてきます」

水島「ああ、なるほどね」

山下「基本的には飛翔体を落とす為には、飛翔体と同じ速度のもので落とさないといけない訳ですよ」

水島「ああ、それはそうですよねえ」

山下「はい」

水島「うん。はい、有難うございます。だから相当、難しいということが、よく解りました。では、海の矢野さん、お願いします」

矢野（一）「はい。陸の先輩、お二人が海上の潜水艦から何から含めて全部、言ってくれま

したので、私は出来るだけ視点を変えて端的に纏めてみたいと思います」

水島「はい」

矢野（一）「まず今、日本のマスコミではトランプ政権の経済政策とかを、酷いねと。アドホックだねえとか」

水島「うん」

矢野（一）「それからウクライナについても、停戦条件がどうなるんだとか、そういうことばかり気にしていますけども、本当に教訓というのを、その中から得ているのかなあというと、私は非常に疑問に思っています」

水島「うんうん」

矢野（一）「例えばウクライナの停戦条件を、日本が心配してどうするんだと」

水島「そらそうだ（笑）」

矢野（一）「はい。ウクライナで一番、日本が心配しなければならないのは人道的にどうだとか、それから停戦条件がどうだとかって言ったって、力の強い方、勝った方が正義だということですよ」

水島「その通りですね」

矢野（一）「はい。力の弱い者は、自分の講和条件すら決める席に参加できないということです」

水島「うん」

矢野（一）「トランプが出て来ただけじゃなくて、各国が力をつけて来たことにもよるんですが、パワーポリティックスと、日本人は意外と力による政治というのを嫌がりますけど、これは、もう連綿として昔から今迄、続いて来ている訳ですよ。それがグローバリズムだとか陰に隠れていただけの話で、これが顕在化して来たということを、我々は一番、注視しなければならないと」

水島「うん」

矢野（一）「じゃあ、これにどうやって対応するのと。ガザなんかムチャクチャにやられても、何も言えない。結局、核保有国が本当に暴挙に出てきたら、これを自分が軍隊で介入してまで、止める国はないということです。誰も助けてくれないよと」

水島「うんうん」

矢野（一）「さっき拡大抑止は揺らいでいるというのも、ここに尽きる訳ですよ」

水島「うん」

矢野（一）「それであれば、何をするんだということになれば、自国の防衛体制を強化するしかないという、基本的には一点しかない訳ですよ」

水島「うん」

矢野（一）「自国の防衛体制を強化するのには、やはり、それだけの装備を入れなきゃならない。そうすると、日本は今、トランプが、また日本にアメリカの防衛装備を買えとか、そういうことを押し付けて来るんじゃないかとか言っていますけど、逆だろうと」

水島「うん」

矢野（一）「アメリカは売ってくれる。最新の武器を売ってくれると言うんだったら、それを買って強くなろうぜと」

水島「うん」

矢野（一）「いちいちアメリカの大統領が変わるたびに、首相がアメリカに行って、尖閣列島は互譲事態に含まれるのか含まれないのかと言って、向こうは当然、波風立てたくありませんから、含まれるよと言ってくれりゃあ、もう大手柄のような顔で帰って来ると。こんなアメリカべったりの安全保障体制を執っていたら何も出来なくなるということを、今

迄、世界が示してくれたじゃないかと」

水島「うん」

矢野（一）「早く日本で、ある一定の防衛努力をやって、それでアメリカの極度に依存した今の防衛体制から離脱していくというのを目指す、まあ、トランプ政権というのは逆に、私にとっては奇禍じゃないかと」

水島「うん」

矢野（一）「これを逆手に取って、日本はアメリカべったりの防衛体制から離れていく。もう一つはAUKUSですよ。集団防衛体制というのを、もう一度、考えていこうと」

水島「うん」

矢野（一）「集団防衛体制が有効だと言うなら、ウクライナ紛争でも示されている訳ですよ。みんな、あっと言う間にNATOに駆け込みは来たですよ」

水島「うん」

矢野（一）「そうすると、AUKUSというものが出来ているんだから、これを上手く利用して日本もその中に能動的に参画していこうとか、そういう風に戦後タブーと我々が捉えて来たようなものを一つ一つ見直して、そして日本の防衛体制というのを新た組み直すというチャンスを、私は、ここで与えられているという風に考えた方がいいんじゃないかと思っています。以上です」

水島「なるほど。はい、有難うございます。では、シュラー小林さん、お願いします」

シュラー「はい。そうですね、まあ、これから世界っていうのは大変化がありますよ」

水島「はい」

シュラー「やっぱり世界警察官のアメリカも、本当に落下しています。弱くなっていますよ。私が話に聞きましたけど、陸軍から9万人を減らすっていう予定あるみたい。45万人、現在の方ね。それで予算が無い。予算が無い。何処から減らしても、それは、結構、ヨーロッパから、もうヨーロッパからも撤退しているんですよ」

水島「うん」

シュラー「だから、トランプさんも、よくグリーンランドのことを言っていて、本格的にグリーンランドでやと思いますよ。オッケー、日本はどうするの。本当に日本が集中して中国について見てて、でも、それも反対の方もあると思う。日本で、よく解っていないんですけど、結構、アメリカの国内の混乱が増えています」

水島「うん」

シュラー「政治的な暗殺未遂みたいなのが、毎日ある」

水島「うん」

シュラー「その警察を利用して人の家に侵入してとか、英語で Swatting って言うんですけど、以前、説明しまして、政治的な放火、知事の家とか何かね、共和党本部とか民主党本部に放火するとか落書き書いて、政治的な意味、判っていますよ。最近、これもあるんですよ。民主党議員が、入国管理事務所の刑務所じゃないけれど、そういう所に捕まっている不法移民を今、凄い暴力ですよ。そういった人達、集まっている、まあ、もう強制送還する、それを暴力的に民主党の議員が侵入しようとしているよ。今、暴力的なのが鉄砲ではなく、警官に殴ったりとか何かね」

水島「そうですね」

シュラー「もう1週間前から始まった」

水島「ありますね。こちら日本でも報道されてましたね」

シュラー「ええ」

水島「はい」

シュラー「だから問題が段々増えているんですよ」

水島「ああ」

シュラー「ほんとに日本は、これからアメリカに頼るかどうか、もう本当に疑い、本当に分からない。自分達でやらなければね。私も、日本の将来には、やはり陸上の予備、凄く増えなければならない」

水島「うん」

シュラー「私の夢は、陸上の方が15万人。15万人が現役、プラス30万人の予備」

水島「うん」

シュラー「それで予備だったら、アメリカの予備システムの規則は半年間ね」

水島「うん」

シュラー「それと家に帰ります。家の近くの部隊で毎月の土日、1つ。それと夏だったら2週間ぐらいの訓練があるようにとかね、それを6年間、ずっと続けるという予備システムがアメリカにありますよ」

水島「うん」

シュラー「あ～、そう…あ、そうそう、あと、アメリカもね、警察の代わりに軍隊も使っています。と言うか National Guard、これは州兵。州兵でも陸軍の2級ぐらいの予備ですよ。まあ、それも、やっぱり警察が足りない。段々犯罪が増えていますよ。日本も、それプラス潜水艦、矢野（一）先生の潜水艦が増える。今、聞いていいですか、22隻ぐらいですか」

矢野（一）「はい。22隻体制です」

シュラー「でも、その22隻、1年間で大体2隻、造るでしょ」

矢野（一）「1隻です」

シュラー「1隻」

矢野（一）「はい」

シュラー「オッケーです。古い方の1隻は、もう捨てちゃうでしょう？」

矢野（一）「そうです」

シュラー「その古いの1隻、捨てないで二級ぐらいの艦隊みたいなのを創ると、全体的に数が増える様に。だから新しい艦隊クラスとか、そういうクラスとかを使って、前の古いやつを、そういうような、そんなに大切じゃないところを巡回すると」

矢野（一）「そういうことをしたいんですが、動かす人が居ない」

シュラー「やっぱり」

矢野（一）「うん」

シュラー「ね。それも、やっぱり徴兵が必要でしょうね」

矢野（一）「まあ、やっぱり予備役というのは、全く整備されていないんです」

シュラー「うん」

水島「いや、そうですね」

シュラー「ね」

矢野（一）「もう陸にいったら悪いですけど、即応予備とか色々なものもあるんですけども、我々から見て、本当に予備役というのは無きに等しいと」

シュラー「うん」

水島「いや、そうですね」

矢野（一）「これでは長期戦が戦えないというのは自明です」

シュラー「うん」

水島「ただ、登録しているだけみたいなね」

矢野（一）「はい」

水島「東日本大震災の時も、上手く運用できなかったっていうね。せっかく予備役の人達も、もう出る準備していた人が居たのに、これは災害出動ですけどね」

シュラー「うん」

水島「それも、やはり手をあげて行きます、行きますと言っても断られたとかね（失笑）、今迄、非常に上手く使ったこと無いですね。はい。だから…」

用田「上手く使おうと思ってつくっていないんですよ、最初から」

水島「まあ、結果としては、そういうことですね」

用田「だから人数を何か少し足しておけばいいやっていう感じだけの世界であって、潜水艦なんか基本的に専門職だし、だから陸だって、そう言われれば専門職はいっぱいあるの
で、その人間は欲しい…」

水島「もったいないですよねぇ、そういうのはねぇ」

用田「結局、手放してしまっ…」

水島「それと、今、定年は海とか陸、同じですか」

矢野（一）「少し延びましたけど同じです。はい」

水島「今、正確に言うと、いくつですか」

矢野（義）「階級によって違う」

水島「ああ、階級によって」

矢野（一）「50、60まで佐官が伸びたんですかね。一佐から」

水島「佐官はね？」

矢野（一）「はい」

山下「いや、60じゃなくて59とかです」

水島「59か」

矢野（一）「59、ああ、そうですか」

水島「ああ、そうでしたねえ、いや…」

用田「全体的に2年ぐらい延びたんですよ」

水島「今の年齢だと、陸を走り回るとか、そういうのは色々あるだろうけど、技術的なものから言ったら今、59でも早いぐらいでしょう。65歳、定年っていうのがね、民間でもそうですから、人によって違うんじゃないかっていうね」

矢野（義）「いや、もうコンピューターを使えたら戦力になるんですよ」

水島「ねえ」

矢野（義）「頭、頭脳ですよねぇ」

水島「だから、そっちの…」

矢野（義）「むしろ民間の特種な先端技術を持っている人の人材を、どう吸収するかっていうのが…」

水島「ああ、そういうのがね」

矢野（義）「一番、予備役の中心になると思います」

用田「だから今、無人機なんかはゲーマーとか、そういう奴が…」

水島「やった方がね」

用田「腹立つんだけど、ゲーマーがウクライナで活躍しているんですよ」

水島「ああ」

矢野（義）「だから女性でもいいし、老人でもいいし、障害者でもいいし」

水島「その為にはお金ですね。そういうね」

用田「だから電磁波なんかを考えると、これなんかを使える人達は、やはり賢い人になる

と、基本的に女性は賢いですから。こういうことを言っちゃあれかも」

一同「(笑)」

水島「でもねえ…」

用田「賢い人達を使おうとすると、むしろ、そういう職役というのは、向いているのかも
しれないですよ」

水島「そうですね。我々が、やっぱり陸上を走り回る兵隊さんみたいなイメージだけど、
今、現実にはそうじゃないですもんね」

山下「一佐は58ですね。一佐は58」

水島「ああ、58」

山下「はい」

用田「58」

シュラー「はい。あと2つのポイント」

水島「はい」

シュラー「もう一つ私が結構、心配しているのは、中国が日本に攻撃する。九州に上陸す
るとか何か南西諸島に上陸するより、国内の問題で何かをつくるとか、いっぱい中国人が
入って来る。今日も来る時に、駅の前で聞いていて、これは中国人じゃないかなあとか、
みんな、家族みたいでデッカイ鞆で、これは観光じゃないみたいだね」

水島「ああ、それは土地とか投資用の日本各地の…私は北海道へ昨々日まで行っていま
したけど、もう殆ど、みんな、観光で来ると称して色んな場所で自分が家を買ったり土地
を買ったり」

シュラー「そうそう、そうそう」

水島「みんな、投資用ですね」

シュラー「だから、こういう管理をする為に公安が増えないと。私は元情報局だったから
ね」

矢野(義)「スパイ防止法を整備しなきゃ駄目ですよ」

シュラー「そうそう、そう」

矢野(義)「土地所有についての規制を、もっと強化しないと」

シュラー「そうそう、そう」

水島「いや、だからね、本当に一番の国防安全保障は、むやみな移民というか、こういっ
た外国人の移入を制限しなきゃいけないっていうね」

シュラー「うんうん」

水島「今、350万人、まあ、永住というか長期的に居る人…」

シュラー「多過ぎる」

水島「それが今度、もう80万人、入れると言っているんですよ」

シュラー「うん」

水島「馬鹿じゃないかっていうかねえ」

シュラー「ね」

水島「例えばクルドも今、クルド人は中心が川口ですけど、一応、そうすると3千人以上
のクルド人が居る。そうすると川口市が75万人ですよ。そうすると大体5%ぐらいの
クルド人が占めている。集団になると、全然、違う。それからクルドの過激派と言われた
PKKが解散声明を出しましたから、もうトルコの副大統領がクルド人だし、閣僚も3人
だかがクルド人。国会議員は複数のクルド人が居る。産経新聞の報道によれば、その難民
だって言っていた人は、みんな、農民で農繁期が終わると出稼ぎみたいにこっち来るって
いうね。全然、政治難民でも何でもないということです。ただ、これも日弁連が人権侵害

と言って、産経とか色んな所に圧力かけたという話を聞いていますけども。はい、有難うございます」

シュラー「あと、もう一つ、最後に」

水島「はい」

シュラー「やっぱり日本人も今、愛国の気持ちが無い」

水島「うん」

シュラー「本当に全然、足りない。私は何か2週間前、2週間前ぐらい、講演会やっていて、元自衛隊の友達が多いんですよ、その講演会に来て何か聞かれた、いやあ、本当に自衛隊に入る人達は、軍隊として本当に日本を守ろうと考えているのは、2割ぐらいしかいない。

あと8割はただの仕事でサラリーマンと一緒に。No、No、No、No、私も軍隊もサラリーマンと一緒にじゃないとか、軍服を着ると、国の為に自分の命を奪うとか、そういうこともあるかもしれない。やっぱりね、あと戦争の方で、そういう左が言って、日本が悪い、悪い、いつでも同じことを繰り返している。私は50年間、日本に住んでいますから、ずっと同じことを聞いている。

だから、やはり、それを、もっと、そういう教育とか何か頑張らなきゃいけない。ちょっと出版社で、出版社、宜しくお願いします（笑）

一同「（笑）」

シュラー「相談しますよ」

一同「（笑）」

シュラー「何か本当のことを教えていって、日本人が誇りを持つべき」

水島「うん」

シュラー「だから凄く大切」

用田「未だ皆さんがお話されていない時にチャチャ入れるのは良くないんですけども、これは本当にファンの人が多いから、あまり言いたくはないんですけども、NHKですよ。NHKの朝ドラ」

水島「うん」

用田「私は、そんなに見ないけど、まあまあ、必然的に観ているんだけど、全部、今は先の大戦のことが絡むんですね。それに対して全て愛国が悪いという、ずう～っと摺り込みですよ」

一同「うん」

水島「そうですね」

用田「だから他のチャンネルもそうだし…」

矢野（義）「軍人は悪者でしょ」

用田「そう、軍人は悪者」

矢野（義）「そのワンパターンです」

用田「とにかくワンパターンで、ずうっと毎朝、放送しているから」

矢野（義）「まあ、GHQのプレスコード以来、ずうっと同じです」

用田「そう」

矢野（義）「何も変わっていない」

水島「そうですね」

用田「すみません。話をする前に…」

水島「昔は自分のドラマで、日テレのドラマだったんですけど、よくあるの、観たと思うんですけど、これは、ちょっと、やり過ぎかも分かんないですけども、教室の黒板に日の

丸を飾ったら、テレビ局からも何からも抗議が来て、いや、俺は貼ったままにするって言ったなら、照明が一切、そこを当てないで真っ暗けにして映らないようにされたっていうことがありました。まあ、大分前です、何十年前ですけどね。別に、それは政治的なあれじゃなかったんだけど、よく学校によっては、そういう教室が昔、あったんですよ。

そういうのが例として、タブーになっていますね。お前、こんなことをやっているとお前もディレクターなんかやれないぞって言われましたけどね。はい。まあ、ちょっと、それは私も、ドラマの中で強引にやっちゃいけないっていうこともあるって今、反省があるんですけど、そういうコードというかね、そういうのはあります。何故、国の国旗が駄目なのかというね」

矢野（義）「書いてある」

水島「うん。そうですよ。はい。どうも有難うございます。シュラーさん、いいですか」

シュラー「ええ」

水島「では、山下さん、お願いします」

山下「はい。今日のテーマは『大変貌する世界の安全保障状況』ということで、4人の先輩方がお話しされたので、もう、それは、その通りで、私も同じ考えです。特に用田さんには何か大学の講義を聞いているみたいで、僕は、お金を払わないといけないんじゃないかと思いました」

一同「(笑)」

水島「いやいや、貴重な話です」

用田「(微笑)」

山下「水島さんが冒頭に沖縄の話をされたんですけども、実は用田さんが現役で西部方面総監をやられている時に、私は沖縄中央協力本部長で、与那国、石垣、宮古の部隊班長を直接、担当していました」

水島「はい」

山下「まあ、あの左がかった沖縄県庁をどうやって切り崩したかとかですねえ、嫌がる与那国町長を、いかに受けさせたかとか、あとは捕まりましたけど宮古島の市長を、どうやって説得したかとかですね」

水島「うん」

山下「もう、これだけでも説明をすると、かなりの時間がかかるんですけども、あの当時では、やはり考えられない南西防衛の基盤が、まあ、そう考えておられましたから、今、出来上がっているっていうことですよ。今、南西防衛で配置されているのは、奄美を入れると奄美、宮古、石垣、与那国と。特に奄美、宮古、石垣は、同じ形の部隊が配置されていますから、地対艦ミサイル、防空ミサイル、普通科中隊と。これは、先程、用田さんがおっしゃったように、戦う中核の、所謂、職種が変わったんですよ。

どういう設計で置かれているかというと、地対艦ミサイルで中国軍の接近を防ぐと。阻止すると。そして、その地対艦ミサイルを航空攻撃から守る為に、防空ミサイルが要ると」

水島「うん」

山下「それから地上から侵入して来る特殊部隊なんか出て来るでしょうから、それから、防護する為の普通科中隊が要るっていう形で、3セット置かれているんですよ。中国側は、あれを第一列島線だとかって言って、西側にアメリカの海軍を入れないって言うんですけども、我々からすると、あそこから出さないということですよ」

水島「うん」

山下「逆に近づけない形で、もう針のポイントをつくっていったっていうのが、今の状況ですよ」

水島「うん」

山下「だから、それから何年も経ちますけども、陸上自衛隊の配置によって、最低限ですけど南西防衛の体制を執れたのかなあとと思います。先程、皆さんがおっしゃった、世界情勢の大激変っていうか、変わったっていうのを前提にして、ちょっと視点を変えると、まあ世界の統治システムっていうか、安全保障のバランスが変わったっていうことですよ

水島「うん」

山下「ということは、戦後80年続いている日本の統治システムは、いいのかっていうことですよ。今、マスコミの話が出ましたけども、我々が今、暮らしている、まあ、憲法から始まる法律とか、或いは、行政組織なんか全部、当時、つくられましたよね」

水島「うん」

山下「占領軍の監督の下につくられた、この統治システムですよ」

水島「はい」

山下「だけどトランプ大統領が日本を守ってもアメリカを守らないっていうのは、お宅が創った憲法で、こうなってんだと」

水島「そういうことですね」

山下「そういうことを言ったら、我々は憲法を改正して内務省を復活するよっていうことですよ」

水島「うん」

山下「それが堪えられますかっていうことですよけども、逆に国内を見ると、やはり、もう破断界じゃないのかなあとと思いますよね」

水島「うん」

山下「特に自衛隊を見ると、ポジティブ法とネガティブ法ってありますよね」

水島「そうですね」

山下「全て、書いてあることしか出来ないと」

水島「うん」

山下「海の前輩がおられますけれども、某事案の時には大砲で撃っていいかって聞いたら、撃っていいって5時間後に来たっていうんですね（苦笑）

一同「（失笑）」

山下「それは間に合わないんですよ。だから現地の指揮官が、書いてあること以外やっていいってして貰わないと出来ないんじゃないのかなあというものを、その時期ですよ」

水島「うん」

山下「それから人の募集も、これは台湾も一緒ですけど、高学歴にしていくと勿論、人口も少なくなると。兵隊に行かなくなるんですよ」

水島「うん」

山下「だから日本も全てが大学、専門学校以上、行っている現行において、募集目標の50%しか採れてないですよ」

水島「う～ん」

山下「だから充足が下がっていくっていうことですよ。じゃあ、手当、手当っていうと、私も中央協力本部長をやっていましたけど、手当では集まらないんですよ」

水島「そうでしょうね」

山下「全員を上げないと。手当は貰っている人だけです。警察が今、警視庁がガバッと30万を超えて出すって言っていますけども、もう常に警察と比べられると低いんです

よね。それが増やせますかって言うと、国家公務員並びだから出来ないって言われる訳ですね。防衛省だけはですね。これは何故かって言うと、我々は軍人じゃなくて武装公務員ですから」

水島「ああ」

山下「公務員です」

水島「特別公務員」

山下「軍人じゃないですよ。だから、そういう根本的な部分が、これから堪えられるかっていう、もうドローンについては、台湾軍は5年間で3200機のドローンを購入するようにしているんですよ。じゃあ、陸上自衛隊は、海空も同じですけど、攻撃型は陸上自衛隊だとしても、ドローンが増えないですね。渡して戴ける電波の周波数だけでは、少ないんですよ」

水島「うん」

山下「この幅でドローンを飛ばせて言う訳ですよ」

水島「うん」

山下「どの周波数で使うんだっていうことになるんですよ。落ちたらどうなっているんだ。あれは落ちるものなんですよ。無人機って落ちていいんですよ。だから無人機になっているんですけど、これが落ちたら大変な騒ぎになるので無人機を落とせないって、じゃあ、これ、何だっていう」

水島「うん」

山下「飛ばす時にはノータムって言って、空域周辺の統制かけられますから出せと。もう雁字搦めになっているので、このままいくと、所謂、台湾有事を見た時に、本当に、出来るのかっていうことですね。弾薬の部分ですよ。旭化成でニトロの工場が事故で爆発して、あれが問題で何処もニトロを作ってくれないので、陸海空自衛隊の弾薬が増やせないですよ」

水島「なるほどねえ」

山下「だから弾薬を外国から買うのかっていう話ですよ。もう色んな所に問題が出て来ているので、せっかくトランプさんがあれだけ言って戴けるので、日本は外圧があると変わるんで、ペリーが来て明治維新なので、トランプ大統領が来たんだから令和維新で変えろっていうことですよ。もう憲法から変えないといけないんですけども、それは出来ないにしても、色んなところで法を改正してって、自衛隊が動けるようにする時期ではないのかなという風に思います」

水島「うん」

山下「最後に、私が、大学にも行ってるんですけど、会社にも行ってまして、弊社でレールガンを開発していますけども、これも民間企業が10年自主努力をして研究していたんです」

水島「うん」

山下「それが時流に乗って、官側から出来るかっていうことでサッと行けましたから、で、アメリカ側も全部、落ちましたが、あのう、やめましたけど、今は、もう海上自衛隊の飛鳥ですかね。あれに積載して洋上で発射実験もやっていますけども」

水島「ああ、そうですか」

山下「あれは極超音速の兵器ですから」

水島「ああ、なるほどね」

山下「あれはマッハ5以上、マッハXですけど、射程も〇〇キロメートルで連続発射をして、弾幕を構成して弾道ミサイルを撃墜するっていうやつなんですよ」

水島「ああ、そうか」

山下「だから飛翔体は安いんですよ」

水島「うん」

山下「それで、ばら撒いて待ち受けをして、そこに飛んで来たら落とすっていうやつですから」

水島「なるほど」

山下「これが実用化されると、研究しているのはトルコと中国と日本ぐらいしかいないですから、これが進んでいくと、また変わって来ると思いますよ」

水島「そういうのを集中して、予算、やってねえ…」

山下「そう。まあ…」

水島「ガンガン、やれば…」

山下「予算は載っているんですけども、とにかく速い速度で、海上自衛隊の方がニーズがありますから、間も無く芽が見えて来ると思いますけど」

用田「海の方は電源があるしね」

山下「あ」

用田「船が港に停まったりして」

山下「そうですね。問題はコンデンサーですよ。急速に充電して、それを発射部分にやりますから、例えば1分ぐらいで6発、発射する時はコンデンサーが6個、要るんです」

水島「ああ」

山下「ギューンとやって発射したら、それが充電するまで時間がありますから、それは、簡単に言えば6個、それが縮められるかと。そして元々の電源部分、供給する電源がどうなるか。そうすると海上自衛隊の船が大きくて電力が余裕があるから、乗せられるということですよ」

水島「ですよ。いや、前に、これは用田さんがおっしゃったように、そういう総技術で言えば、民間でも電気自動車の充電にも応用できるじゃないですか」

用田「山下君のところに行ってお願いをしたんだけど、肝心の電源の方をつくる技術者が全然、営業的センス、事業的センスが無くて未だものにならない。なったら、大分、違うけど」

山下「そうですね。電源部は電源部で会社があって、そこはちょっと弱いというですね」

水島「なんだかね…」

用田「でも世界中ですから」

水島「そうですね」

用田「世界中、その電源の部分は熱を持ちますから」

水島「そうですね」

矢野（義）「核の原子炉。小型原子炉をつくらないと」

水島「そうですね。はい。有難うございます。では、山口さん、お願いします」

山口「今日は、私以外は全員が軍に所属したことがある人達」

水島「だから山口さんと呼んだんですよ、はい（笑）」

山口「だったら政治とか外交の部分の話をさせて戴くのかなと思ったら、それはここまでで全部、出ちゃいましたね」

水島「まあ、そうですね（笑）」

山口「ええ。私は、さっき山下先生がおっしゃった時、全ての、まあ、エルドリッチさんを含めて、6人の先生の集中講義を受けに来た予備校生のような気持ちでありますので」

水島「いやいや（笑）」

山口「特に、私から、これを申し上げるというのは、もう逆に僭越で、色んなお話をお伺いしたいと思っていますんですが、じゃあ『大変貌する世界の安全保障状況』というタイトルについて言えば、大変貌していますよね。何故、大変貌しているのかと言うと、安全保障よりは外交とか、世界情勢とか、そういうことで大変貌が始まっているとすると、まあ、安全保障の専門家の皆さんと違う立場の政治記者として、或いは、外交記者としての私も少し言うことがあるのかなと」

水島「いえいえ」

山口「敢えて言えば、何故、大変貌しているのかって二つに分けて考えた方がいいと思うのは、トランプ前から既に大変貌が始まっていた部分がある。それは安全保障環境が激しく変わって行ってしまうのは、1月20日のトランプ大統領の就任の前から激しく変わっていた部分。それからトランプさんが就任したあとに激しく変貌したもの、違う変貌ですね。これは、きちんと分けて見た方がいいねと。例えば、先程も5人の先生方がおっしゃっていた、中国の恐るべき軍事技術、或いは配備」

水島「強化ですね」

山口「質量共に圧倒しつつある、色々なジャンルで、全てではありませんけどね、これはトランプさんになる前から始まっている。相対的に、いつもシュラー小林さんがおっしゃるように、米軍の弱体化」

水島「うん」

山口「これは、例えばバイデン政権がLGBTを潜水艦に持ち込んで、ゲイの人が来ちゃったらどうするのみたいな…」

一同「(苦笑)」

山口「そういうアメリカの発狂した前政権による弱体化っていうのは、ずうっとテンデンスー、傾向としてあったという部分。それと安全保障環境を、軍事というよりは、外交上で見れば、はっきり言うと、トランプ大統領が今迄の全ての大統領とは全く違う目的意識とコンテクストと戦略で、大統領を4年間務めるということは、もう確実ですから、トランプ後に起きた変貌は、実は各国の国内的なディープステイトの闘いが世界規模にマッピングされている状態」

水島「広がっていますからね、うん」

山口「だからアメリカ対ヨーロッパとか、そういうんじゃないくて、例えば、イギリスの中でも戦いがある。だからナイジェル・ファラージという人が、急速に選挙で勝っている」

水島「うん、うん」

山口「或いは、イタリアではジョルジャ・メローニが首相を務めている。それから、それを潰す為に、例えばマリーヌ・ルペンという人が有罪になるとか…」

水島「そうですね」

山口「極右判定をされ、これもリパーカッションとしての、ディープステイトと反ディープステイト、反グローバリストの闘いが世界中で起きている。起きていないのは簡単に言うと、日本だけですな(苦笑)」

一同「(苦笑)」

山口「そういう状況の中で、トランプ就任前から起きていた部分は、かなり深刻な軍事的不均衡、或いは、日米の劣化。それについては、もう今日、是非、先生方に現状と対処について、私は素人としてお伺いしたい。それからトランプ後の変貌については、何故、ウクライナ和平をサウジでやっているのと」

水島「うん」

山口「それから、何故、トランプはサウジには行ったけど、イスラエルには行かないの

と」

水島「うん」

山口「これは、あり得ないことですね」

水島「そうですね。今迄は全部、必ずイスラエルに行っていますね」

山口「だけど、よく考えたらトランプ大統領って第一次政権の時も、最初に行ったのはサウジですよ」

水島「そうだよねえ」

山口「そうすると中東っていうのは、今後の世界の安全保障状況を考える時には、政治的にも軍事的にも、実は非常に重要な地域になるということについては、例えば革命防衛隊とは何ですかとか、あのガザ戦争が起きた、その前はイスラエルとサウジ、或いはイランとサウジが和平交渉が始まっていたから、ガザ戦争を起こした奴が居る訳ですね」

水島「うん。そういう訳ですね」

山口「こういうグジャグジャになっているものを一個一個、棘を抜いているトランプさんのやり方が、世界の安全保障環境を激変させる結果になるという意味に於いては、多少ね、軍事だけ見ていると分からない部分については、例えばウクライナ和平」何故、中東特使のスティーブン・チャールズ・ウィトコフ（Steven Charles Witkoff）がメインでやっているの」

水島「うん」

山口「これはプーチンとの関係。それでトランプさんの頭の中は、世界の安全保障環境を見ているというような意味に於いて、皆さんの軍事、安全保障情報と、私が見ている世界観とマッチング出来たら、今日は凄く良い回になるんじゃないかなと思っています」

水島「そうですね」

山口「宜しくお願いします」

水島「本当に、そういう意味で山口さんに来て戴いたんですけど、ついに昨日、一昨日、ずうっと、やっているんですけど、やっぱり今、おっしゃったサウジアラビアへ行くっていうのは…」

山口「はい」

水島「つまりトランプの考えているロシア、サウジアラビア、アメリカというのは1位2位3位の産油国になる。それから、今、用田さんがおっしゃっていた、トランプのロシアとの関係が出来ると、基本的に中国がはみ出す」

山口「はい」

水島「今、中露同盟って言われているけど、現実の内閣は、この間、習近平を訪ねて会った時の声明を見たら、物凄く冷たいんですね。全然、成功していない、失敗したんだっていうのが、よく解るんだけど、戦略的な協力関係っていうように最後に結論付けている。これって全然、友好でも何でもないですよ。北朝鮮とね。だから、やはり中国との距離はきちっと持っている」

山口「はい」

水島「それでミアシャイマーというのは私も大変、発言に注目している方ですけど、あの外交評論家って言うかバランス・オブ・パワーのある人が、イランは核兵器を持つべきだって。ちょっとビックリしたんですね」

一同「うん、うん」

水島「トランプは今、持つべきじゃないって言っているんですよ。持たせないと。許さないって言っているけど、本当にそうかなというねえ、サウジアラビアも持つ。つまり今迄やってきたのは、イスラエルはやりたい放題、もう5万人以上、パレスチナ人を殺してい

る。こういう中で、ネタニヤフを切ったか切らないかっていう問題もあるんだけど、実際トランプがやっているのは、サウジとイランを抑えれば、それからシリアと制裁をやめ
たし、今、会談もしている。ということは、実は中東に平和が来ちゃう。イスラエルをど
うやるか。イランをちゃんとやればって、全部、手を打っているんですね」

山口「(頷く)」

水島「だから本当に、そういう意味ではね、戦略的に、こいつ、凄いなあというね」

山口「だから、とっても大事なものは、バイデン政権はネタニヤフが大嫌いだったんです
ね。これは何と言うか、もうDNA的に嫌いだったんです」

水島「そうですね(笑)」

山口「今、トランプはネタニヤフと距離を置いているのとは、全く種類が違います」

水島「うん、そうですね」

山口「そこの違いが判ると、或いは、解らないと、実は、ウクライナの和平も、或いは、
サウジ、イラン」

水島「うん。そうなんですね」

山口「これは、このまま行けば、もう和平に行きますから」

水島「うん」

山口「そういう大変貌の入り口の糸口みたいなのは、いくつかありますね」

水島「そういうのはありますねえ」

山口「はい」

水島「それは非常に大事な話でした。では、お待たせしました、エルドリッチさん、お願
いします」

エルドリッチ「はい、お願いしまあす」

水島「はい、どうも」

エルドリッチ「今、アメリカに来ているんですけれども、ここで色んな調査、研究をして
います。歴史的な研究。これは後程、紹介します。そして今、アメリカの社会がどうなっ
ているのかを自分の目で確認したいと思って来ているんですけれども、去年は1年間、台湾
で過ごして台湾の社会はどうなっているのか色々見て来たんですけれども。今、アメリカの
中に行って政治、社会、経済、対外政策といった様々な観点から見ています。その中
で、私は熱心にトランプ候補、そして、トランプ大統領を支持していたんですけれども。
けれども…」

水島「けれども、はい」

エルドリッチ「最近、心配するところもあって、やっぱりディアスの影響力が…」

水島「ああ～」

エルドリッチ「やっぱり相当、まだ強い。彼の政権、或いは、そのやろうとしていること
に、かなり邪魔している。ディアスが主体的に邪魔しているのか、それともトランプ自身
が、或いは、トランプ政権の中に、ややディアス的なところがあるのか、それを、やっぱ
り見ているんですけれども、最近、イスラエルとの関係が、ちょっと悪くなっているの
は、それが演劇的にやっているのか、それとも本音で距離を置こうとしているのか、それ
が未だ断言できない」

水島「そうですね」

エルドリッチ「でも先程、話がありましたように、表面的には色んな距離を置こうとして
いる。これがサウジだけではなくイランだけではなく、つい最近、人質の問題の解決」

水島「ああ、はい、ありましたねえ」

エルドリッチ「イスラエル抜きにやったらしい。だけど、そこにも別の裏の話もある」

水島「うん」

エルドリッチ「あとイエメンとの合意とか、それから、これがイスラエルと距離を置こうとしているのはいいと思うんですけども、やはりイスラエルのアメリカ国内の影響力が依然として強い」

水島「うん、うん」

エルドリッチ「これがユダヤ人に対する、要するに宗教に対する批判ではなく、シオン主義の、要するに、その主義に対する問題で、信仰宗教ではなく主義、イデオロギーに対する問題で、これが、やっぱりアメリカの場合、特にエリートの人達の間で強く感じている」

水島「うん」

エルドリッチ「だからトランプが何処まで、それを抜けられるのか、或いは、本当に抜けようとしているのかが未だ明確ではないなあと、正直、心配している。そうであれば、この日本は、ある意味では、まあ、ある意味と言うか、日本はアメリカに、もうあまり期待できない」

水島「うん」

エルドリッチ「はい。要するにアメリカの対外政策に巻き込まれる」

水島「うん、うん」

エルドリッチ「危険性、要するに岸田政権のようになっちゃう。そういうところがある」

水島「うん」

エルドリッチ「もう一つ、トランプ政権の運営に心配するところがあるんですけども、これが政府の効率を目指しているDOG Eという動きだった」

水島「うん」

エルドリッチ「私は物凄く期待していたし、支持していたんですけども、どうも最近、この節約した予算が、ほぼ、そのまま軍の方に国防費に回すことになっている」

水島「ああ、なるほど、うん」

エルドリッチ「うん。この国防の予算では、これが単純に、或いは純粹に軍に行く、或いは軍人の生活の改善とか行くんじゃないくて、その間に入っている政治家、そして軍需産業とか、そして不要な戦争の為に使われる」

水島「うん」

エルドリッチ「これがトランプを熱心に支持した有権者」

水島「うん」

エルドリッチ「所謂、MAGA。MAGAの人達に対する公約に反するものです。だから節約したものは、国民に返す。要するに納税者に返すということが、求められたというよりも約束された。これが、もし実現しなかったら、多くの国民が、やはりトランプ政権に対してうんざりする。政治、政治家に対して一層、うんざりすることになる。何を言いたいかと言うと、このトランプ政権に対する期待外れが結構、多くなっている」

水島「うん」

エルドリッチ「残念に思う人達が増えている。そうすると、結局、政権運営が難しくなる気がする」

水島「うん」

エルドリッチ「もう一つ申し上げたいのは、今の国防長官、ピート・ヘグセス（Peter Brian Hegseth）さんですけども、彼が国防省改革を目指している。これは絶対に必要」

水島「うん」

エルドリッチ「必要ですけども、もし軍の方が無条件で予算を貰ってしまったら、改革

への障害になる。結局、ヘグセスが目指している改革が、中々実現出来ない危険性がある。つまり抵抗勢力が相当、調子に乗る」

水島「うん」

エルドリッチ「つまりディープステイトとか、そういう人達。彼が最近、目指していると言われているのは、この米陸軍の改革。ご存じと思うんですけども、彼は陸軍出身です。戦闘の経験がある、最近で言えば珍しい国防長官ですけども、私がちょっと心配しているのは、例えば海兵隊、或いは海軍とか空軍のことは、もしかすると知らな過ぎで、その組織も、やっぱり改革が急務ですけども、陸軍だけやったら、つまり彼が一番、知っている陸軍だけになってしまうと、米軍四軍の中の均衡な改革が出来なかったら、その統合的な戦いが上手く出来ないということを心配している。

だから、彼の陸軍改革の中身を、もう少し見る必要があるかと、他の3軍に対して、どのような方針を持っているのかを見ないといけない。あと、多分、日本でもニュースになっていたんですけども、彼が、その軍の制服組の幹部の人員を削減しようとしている。特に、4つの星」

水島「大将ですね」

エルドリッチ「その中將以上の人達を、20%ぐらい減らそうと」

水島「うん」

エルドリッチ「はい。それでも未だ多い（笑）、アメリカが物凄く増えてしまったんですけども、そういうような改革をしようとしている。そして以前からの課題で、先程、山口さんも言及していたんですけども、LGBTQの延長線であるジェンダー、或いは、アイデンティティ・ポリティックス、DEI政策。彼が頑張ってやめさせようとしている」

水島「うん」

エルドリッチ「あと経済とも関係する、サプライチェーンの確保。それが日米の連携のところで非常に期待したいなあという風に思っています。これから、日本の軍事産業が世界を舞台にして活躍できたらいいのではないかと思っています」

水島「はい」

エルドリッチ「あと、もう一つ、トランプ政権で、ちょっと、どっちになっているのが未だ見えないのは、製薬会社との関係」

水島「そうですねえ」

エルドリッチ「その例の接種の問題で、ちょっと行ったり来たりしている」

水島「うん」

エルドリッチ「だから、それを見守る必要がある。これが日本は関係ない、アメリカの話だと思ったら大間違いです。やはり日本が直接、影響を受けることになっている」

水島「そうですねえ」

エルドリッチ「あと、アメリカで見たりしているのが、今年の2月にアメリカの野党、まあ、永遠的に野党で居て欲しいんですけども」

一同「（笑）」

エルドリッチ「民主党（苦笑）、民主党の全国委員会の委員長選がありました。これが想像出来ると思うんですけども、去年の、あの人、誰だった？ハリス。ハリスの大敗と同じ日に、当時の委員長が次の選挙には再選に向けて出馬しないだろうという話があって、で、結局2月1日に選挙をやった。その結果として、あまり有名ではない当時の副委員長が委員長として務めることになりました。これが、まあ、どうでもいい、多分、日本の民主党のように、もう、どうでもいいと思われるかもしれないんですけども、いいことが一つありました。それはディープステイトが応援していた人が負けた」

水島「おお～」

エルドリッチ「その意味では、民主党の中では改革の必要性を、ちょっと感じ始めている。そうすると、良い意味で元気な野党になったら、アメリカの共和党、その与党が緊張感を持って、もっと良い政策を打ち出す。要するに、そういう健全な民主主義が少し期待できる」

水島「うん」

エルドリッチ「ですけれども、彼らの議論は、色んな討論会されていたんですけれども、議論を見ている限りは、結局、改革の中身がない。だから殆ど解っていない」

水島「うん。うんうん」

エルドリッチ「あと、もう一つ良い事があったのは、以前の番組で申し上げたんですが、水島社長、そして山口さんが大好きなエマニュエル大使」

水島・山口「(笑)」

エルドリッチ「彼は結局、委員長選に出なかった。本人は出ると言っていたんですけれども結局、出馬しなかった」

水島「ああ、そうですか。ああ～」

エルドリッチ「辞退と言うより、そもそも出なかった。これは民主党が相当、問題があるなあと思っていた」

水島「そうでしょうねえ」

エルドリッチ「はい。だから大物が出なかったことは、やっぱり面倒臭いのか、次の中間選挙、来年にある中間選挙、3～4年後に大統領選挙は勝てないという計算だったかなあと思っています」

水島「なるほどね」

エルドリッチ「もしエマニュエル大使が委員長になったら、共和党が恐れる組織になる可能性があったと思う」

水島「ああ」

エルドリッチ「彼は狡くて汚いから。だけどもそうならなかったのは、良かったなあという風に思っています」

水島「はい」

エルドリッチ「あと、ここで一つの歴史研究をやっているのは、アメリカで色んな資料を収集している。冒頭で水島社長が尖閣の話をしていただいたんですけれども、この間、皆さんがご存じのように、中国がヘリコプターを飛ばしていたんですけれども、実は、私は前から研究しているのは、日本が仮に46年前、1979年に魚釣島でヘリポートを造った」

水島「はい」

エルドリッチ「ある調査が、尖閣の5島の内の3島で行われました」

水島「うん」

エルドリッチ「魚釣島、北小島、南小島。残念ながら久場島、大正島で、その調査はやらなかったけれども、これが全政府の関係者、そして琉球大学が協力して調査を行ったんですけれども、その調査を実行する為に、その人と機材を運ぶ為にヘリポートが造られていた」

水島「そうですね」

エルドリッチ「その当時の議論、まあ、政府内の議論を見ているんですけれども、残念ながら、それが撤去された。理由は多分、想像出来ると思うんですけれども、あの隣の煩い国が色々言って、政府が物凄く弱くなって、中国の抗議を受け入れた」

水島「うん」

エルドリッチ「その代わり、これは未だ、これからの調査研究ですけども、その代わり共同開発の議論に転じた」

水島「うん」

エルドリッチ「この時期に一ついいことがあった。まあ、やったことは凄く良かったですけども、あと、調査もやったし、ヘリポートも造ったし、海上保安庁が何回も運んだりしていたんですけども、もう一ついいことがあったのは、米軍が上から視察していた」

水島「うん」

エルドリッチ「うん。これが日本政府の記録に残っている」

水島「うん」

エルドリッチ「つまり日本政府が、米軍が非常に関心をもっている。まあ、良かったというような表現をしていたんですけども、これから、もっと徹底的に調査しないといけないんですけども、いずれ、これは論文に纏めたいという風に思っています。逆に、情報があれば教えて下さい。以上です」

水島「はい。有難うございます。尖閣の問題は今、エルドリッチさんからお話がありましたけど、エルドリッチさんも実際は米軍の沖縄の所に勤めていた時、一緒に我々へ行こうとして突然、沖縄の那覇で彼のところに電話がかかって来て、あれは司令からでしたか」

エルドリッチ「はい」

水島「行くなっていう」

エルドリッチ「(笑)」

水島「それで(苦笑)、急遽、行けなくなっちゃったんですけど、あの時も休暇で行くってことだから問題は無かったんですけど、命令ですから、行けなくなったっていう、そういう思い出がありましたね。今言った、そういう記録っていうのは、我々が36回、漁業活動やって来たっていうのは、あの時はジャーナリストも行ってたんですよ。国会議員も行ってたんですよ。みんなで漁船に乗ってね。こういったものは実際、実効支配の一つの証拠になるだろう、漁師さんと一緒に魚を獲って…、私が行けなくなった理由が、この間の一審で、海上保安庁と今、ちょっと争っていたんですけど、私は純粋な漁業従事者じゃないと。

私は第一桜丸っていう船もオーナーで持っている訳です。そして20回も行っているんですけども、魚も獲っているし、船の掃除もやっているんだけど、その判決理由の中に書いてあったのは、魚釣島の所で魚を獲っていたら、中国船が近づいてきたので、水島は、中国船に向かって『日本の領海から出て行け』と繰り返し大きな声で叫び続けたと。

これは政治活動であると。だから純粋な漁業者とは言えない。だから行かせないというね、本当に真面目な話、これが判決文に書いてあるんですよ。中国公船が領海侵犯して我々の所に近づいて来なきゃ、黙って魚獲って帰って来るだけだった。領海に入ってくる奴が、我々の船に近づいてきたから、我々は出てけえ〜って、日本海、日本領海から出て行けと言った。これが純粋な漁業者じゃないと。漁師は、魚を獲ることしか考えていない人間なのかと。

日本人だからね、そんな自分の庭へ入ってきたら、出て行けっていうのは当たり前でね。でも、これが真面目に一審の判決ですよ。私は今、もう空港に行くと、海上保安庁と公安の方がお迎えに出て来て、いらっしゃいませって言って、石垣では、ずうっと付いていさせて貰いますと、そうになっているんです。

漁師はギリギリ行けるけど、それも凄く圧迫があって、今は一隻、うちの仲間達とかね、仲間さんという市議さんが漁師兼ということで、彼も一種の政治家ですよ。いつもは漁師なんかやっていないんだけど、彼は行くのが許されて、私だけは、まあ、上陸したと

か、そういうのがあるんでしょうけども、こういうような形になっています。

それと、これは衛藤晟一さんっていう方が領土大臣っていうのをやられた頃、彼に頼まれてレポートを出しました。私が提案したのは、久場島は、米軍の射爆場になっていて未だ契約が残っているんですね。だから石破さんとか、当時は違いますけども、日本政府がアメリカ軍に要請して、自衛隊と米軍の上陸訓練でも何でもいいから、久場島で実行したらどうだと。もう、これだけで中国軍は一切、来れなくなると。

つまり断られてもいいから、言ったらどうだと。聞いてみたらどうだと。こういうようなことも、米軍が返事してくれりゃあ、それでいいですよ。いや、出来ないとか。いや、やりましょう。やってくれたら大変、良かった。こんなの10年前に言っているんですよ。

起こることは全部、予想して衛藤さんに報告しているんです。こうやりますから、こうやりますよ。今度、恐らく最終的には、200隻ぐらいの小笠原諸島に行った武装漁船ですね。100トンクラスの。我々の船、石垣とか宮古の船は9トン、8トンです。巡視船にぶつかって来たのは100トンぐらいの中国船ですから、海警の船、或いは中国海軍の船が200隻、魚釣島を囲んで来たら、日本政府はどうするんですかと。絶対に手が出ないですよ。

それで、その内の連中が上陸したらどうするんですかと。日本の警察、或いは、海上警察、海上保安庁は何かやれますか。出来ません。だって、自衛隊だって防衛出動が出なければ動けないんだから、警察活動しか出来ないから、ということは、結局、盗られちゃう。

もう、いつでも、あれは盗られる状態になっているんです。いつも言いますけど今、中国の海警の船が何処に居るかって言ったら、魚釣島の一番、近い所に居ます。その外に日本の巡視船が居ます。その外に我々の漁船とかが魚を獲っている。一海流域は入るなって言われているから勿論、入れないですね。こういう状態ですよ。誰が見ても悔しいけれども実効支配しているのは誰なんだと。

最近では、もう警告も出さなくなっている。音声とか、ああいうので…、まあ、なあなあとは言わないし、現場の海上保安官は本当に可哀想ですよ。悔しいと思います。12年前ですけど、私が上陸した4日前に沖縄県警と待ち構える中で、中国人が上陸した時、それは民主党政権のやらせだったんですけど、ただ、私が上陸したあとで聞いて嬉しかったのは、海上保安庁の巡視船から万歳、万歳って声が上がったそうです。私が島から帰ってきて船に上がったら、海上保安庁の職員が待っていてお疲れ様でした、ご苦労さんでしたって、本当にそういう感じでしたよ。今、私は、とても入れなくなっているけど、実は現場の海上保安官は自分の領土を守りたいんですよ。これは政治家が、ちゃんとやればと感じます。

現実には言えば、この間、中山さんという市長が調査船っていう形で行って、国会議員も何人か乗せて調査したことは良い事だったと思いますけど、こういう状態ですから、さっき、山下さんがおっしゃっていた台湾有事。でも一番、弱い所は尖閣ですよ。向こうが好きな時にいつでも何にでも出来る。何かやったら手が出ないっていうね、いくらなんでも何かやったら、台湾は頑張るでしょうね。

我々の国は本当に『許し難い暴挙』と言うだけじゃないかという気がするんでね。はい。ということで色々皆さんにお話を伺いましたけど、ちょっと休みに入ろうと思いますけど、さっき山口さんが言った問題ですね。それからエルドリッジさんが言った問題は、微妙な問題ですけど、イスラエルに対するトランプ政権のスタンスですね。

これは今、芝居でやっているんだという言い方もあるし、本当に何処までか見極めが判ら

ない。冷たくしている時は、実はラブコールを送っているっていうね。態々行かなかったのは、そういうのを見せている。サウジとか色々あっちにね、ということもあるんですけど、この問題は、イスラエルの核兵器を持っている問題を、ミアシャイマーが『イランにも核兵器を持たせるべきだ』ということまで言って、つまり、そうするとバランスがとれて、と言うんですけど、持たせるのか持たせないのか。

イスラエルも持っているとは言っていないんですけども、前に矢野（義）さんが言ったように、ほぼ出来ているというようなことで、そういう形の誤魔化しで中東の和平をやっていくのかね。この辺の問題を、あまり長くなると困るんですが、一言ずつでもコメントを戴ければと思うんですけど、矢野さんはどうですか」

矢野（義）「もう亡くなったケネス・ウォルスという人が言っていたのは、核というのは拡散させれば、むしろ、その地域内で局地的なバランスがとれて、返って平和、秩序が齎されるという見方があったんです。これについては、偶発事故の問題とか、核拡散自体が非常に核のリスクを上げるという意見が大半で、認められなかったんですけども、私はケネス・ウォルスの意見というのは非常に正しいと思います」

水島「はい」

矢野（義）「ですから小国同士が、大国の横暴を抑える為には、むしろ核を持つべきだと。それによって世界的にも地域的にも、紛争のエスカレーションが抑えられる。例えば今回の印パ紛争もそうですよね」

水島「そうですね」

矢野（義）「中東については、トランプ政権の考えですが、北朝鮮について核保有国とトランプさんは初めて、はっきりと言いましたけれども、同じことをイランについても、表向きは核保有反対とは言いながら、実は、トランプ政権は最初から国連大使等に図りかけをして、イランと交渉をやっているんですよ」

水島「うん」

矢野（義）「ですから、私は、もう実質的にイランの核は軍事的に潰せないと」

水島「うん」

矢野（義）「つまりイスラエルとアメリカが協働しても、それでも破壊は困難だという見極めをして、そのリアリズムの上に立ってイランの実質的核保有はもう仕方ないと。但し、表向きは認めないけれども、それなりの扱いはするということで、むしろイスラエルの核を相対化して地域間のバランスをとって、そこで中東の安定化へもっていくというのが、トランプ政権の基本方針じゃないかと。私はそう見ています」

水島「ああ、だから、そうすると…」

矢野（義）「そうしたら収束方向に行くと思います」

水島「ロシアとも仲良くなれますね」

矢野（義）「そうです」

水島「そうですね」

矢野（義）「それでロシアとアメリカもウクライナを通してお互いに手を打って、はっきりと、大国は、もう中東から手を引くと」

水島「うん」

矢野（義）「地域内の大国間のバランスをとると。場合によっては核の均衡も認めるという方向に行くと思うんですね」

水島「はい。用田さんはどうですか」

用田「この回、核の話については、私も全部、承知していませんけども、今の流れから見ると、先程、申し上げましたようにプーチンが直接、イランのハメイニに会っているって

いうことは、ハメイニが決めないと、この核の問題については決まらないんですよね」

水島「はい」

用田「そうすると、相当、中味のことを当然、話をしていると」

水島「しているんですね」

用田「だから、今、矢野（義）さんのおっしゃる通り、核保有を表向きに持っているというとは言えないですね」

水島「うん」

用田「言えないけども、その中でハメイニと、これ、分かりません、プーチンとの間の中で取り引きが当然、そこにある訳で…」

水島「うん」

用田「それは、例えば核の最小限の濃縮を本当に最小限にしろと。今、技術的な問題を詰めていると言っているんですね」

水島「うん、うん」

用田「だから、その技術的な問題の解決は出来るんじゃないかという風に言っているんですね」

水島「なるほど」

用田「ただ問題は、核の開発ということについては分かりません。分かりませんが、正確には言えないけども、プーチンだと、そこは俺の所に来てやれよと言うのかもしれない（笑）」

水島「そうですね」

用田「そうすると、表向きの建前上は基本的に認めないということとを、そのまま言いながら、所謂、トランプの顔も立てて、先程、申し上げたように、イランは絶対にロシアを潰せない」

水島「うん」

用田「絶対、NATOは生き残って貰わないと困る」

水島「核心的だね」

用田「核心です。だから、そういう意味では、今回、そうだし、だから、そういう流れになる可能性は…、プーチンが、イランに行ったというのは5月の13日に行ったっていうのが…」

水島「いや、そうなんですよ」

用田「今、何処に居るのと。ちょっと分からないんですけども、それが一つと」

水島「うん」

用田「だから、先程、おっしゃられた様に、トランプは今、サウジに行って、今、オマーンの方に移っているらしいですが、何処の場で言うのかなっていうのは…、核の平和利用ですね」

水島「うん」

用田「サウジ。これでバランスをとるという世界はあるのかなと」

水島「だから表向きはともかく、基本的にはサウジ、イラン、イスラエルぐらいまで」

用田「だから表向きはどうかとして、核というものが、そこに埋め込んでいくというのは、あり得るのかなと、表向きは」

水島「そうですね。中東がね。はい」

用田「もう一つ、これはネタニヤフにとって決定打になっちゃうんですけども、パレスチナ二国家、二国共存っていうやつを発表するのかなあと思って見ていたんですけども、今のところ、それは無いので」

水島「無いですね、今。はい。この辺が、ちょっと議論がね…」

用田「そこが先程、これは山口さんに聞かなきゃ分からない」

水島「はい」

用田「お互い、プロレスごっこをやっているのかという世界ですね」

水島「そうなんです。今迄のパターンは必ず全部プロレスですからね。中国との関税の問題も」

用田「ただ、今回のネタニヤフに対するやつはフーシをやめるとか、黙ってアメリカ国籍のイスラエルの軍人を…」

水島「解放した」

用田「解放したとか、これは、やっぱり当然、メッセージは相当、送っていますよね」

水島「はい、そうですね」

用田「ネタニヤフは外すというコンセンサスが何処かにあるのかなと」

水島「これは、もう鉄砲玉で随分、やる。やるだけやらせて、ポイッっていうパターンはあるかもしれない」

用田「でも酷いでもんねえ」

水島「そうです。やられた方もやる方も酷いんですけど。矢野（一）さん、どうですか」

矢野（一）「はい。もうイスラエルが核を持っているというのは当然、確実ですよ」

水島「うん」

矢野（一）「これは、もうアメリカ海軍の人間が、イスラエルにドルフィンQっていう潜水艦がありますが、この潜水艦から核巡航ミサイルを撃てる能力があると」

水島「うん」

矢野（一）「実際に持っているということは、確認していますし」

水島「うん、そうですね」

矢野（一）「今、イスラエルはドイツでドラゴンQという潜水艦を造っていますが、これは弾道弾を撃つ発射管を持って建造されているんですよ。もう進水していますけど」

水島「う～ん」

矢野（一）「もうイスラエルは、持っている事は間違いないと。もう一つ、アメリカの懸念は中国の核戦力ですよ」

水島「うん」

矢野（一）「物凄い勢いで核弾頭の数が増えていると」

水島「うん、そうですね。はい」

矢野（一）「先般、ソ連はですね、ああ、ソ連じゃない（苦笑）」

水島「ロシア」

矢野（一）「ロシアは、中国に20%の低濃縮ウランを渡しているんですよ」

水島「うん」

矢野（一）「何故、これを渡したかと言うと、中国の高速増殖炉が、この装荷燃料で動くことが出来るんですよ。もう稼働しているというのも確認出来ています」

水島「ああ」

矢野（一）「そうすると、この高速増殖炉でプルトニウムをつくり始めれば…」

水島「いくらでもね」

矢野（一）「はい。彼らが言っている通り、2035年までに1500発の核弾頭が出来る。アメリカは中国の核弾頭に対応しなきゃならない。そうすると他の所の拡大核抑止なんか、もう、そんなこと言ってる時じゃないと」

水島「いや、そうです」

矢野（一）「はっきり言えば、もうロシアと中国とで手いっぱいだと」

水島「うん。いや、そうになると…」

矢野（一）「はい、そうすると、他の地域は他の地域で、核のバランスをとってくれよと」

水島「うん、というね」

矢野（一）「はい。それでサウジアラビア、イラン、まあ、イランがつくるのであればサウジアラビアは当然、うちも持つと」

水島「言うでしょうね。はい」

矢野（一）「はい。もう犬猿の仲ですからね。そうすると、どっちも限定の…」

水島「うん、バランスがとれちゃうんだよね」

矢野（一）「はい。バランスをとった、限定された核弾頭だったら、保有を認めようじゃないかと」

水島「ああ、その辺が落としどころで」

矢野（一）「それで手を打ってくれよと」

水島「なるほど」

矢野（一）「うちは中国に対応しなきゃならないと。また北朝鮮にも対応しなきゃならないというようなことを、裏で画策しているという可能性はあると思います」

水島「なるほどね。その通りだと思うんですけど、もう一つは今、トランプの狙いは中国とロシアのね、自分の方にもって来る、さっき言った反グローバリズムの流れで、そうするとゴロンと、又、変わっちゃう。つまり食糧やエネルギーや今、言ったウランも含めてね」

矢野（一）「はい、核燃料ですね」

水島「核燃料を含めて、つまり中国に無いものをロシアは持っていて、食糧もエネルギーも全部、供給で、お互いに助け合っているけど」

矢野（一）「そうです」

水島「これがアメリカ側に行っちゃうと、実は、中国の包囲網になっちゃうというところは、中東も自分の味方というトランプの大戦略っていうのは、その辺にあるんじゃないかという気もしているですけども。シュラーさん」

矢野（一）「あのう…」

水島「あ、どうぞ」

矢野（一）「ご承知の通り、アメリカは今、ロシアのウラン輸出を制裁で止めています」

水島「うん」

矢野（一）「中国からウランを買っている訳ですよ」

シュラー「うん」

矢野（一）「ところが、ロシアは中国にウランを売っている訳ですよ」

水島「うん、まあ、何となくわかるね」

矢野（一）「いくらでも中国に売ると。中国からアメリカに、その分の核燃料が来ている訳ですよ。全然、制裁なんか効いていないですよ」

水島「だから、そこは本当に…」

矢野（一）「はい」

水島「今の中国は大変、上手くやっているって言えば上手くやっていますよね」

用田「ロシアはアメリカに売っていない？」

矢野（一）「アメリカには売れないんです。今、制裁をかけられているから」

用田「止められてる？」

矢野（一）「ですからアメリカは、ロシアからのウランの輸入を止めているから。はい」

矢野（義）「完全には止めていない」

水島「完全にはね」

矢野（義）「ヨーロッパもそうですよ」

用田「ヨーロッパも」

水島「はい。シュラーさん、どうですか」

シュラー「まあ、アメリカ人も結構、イスラエルには疲れています。特に、ずっとガザで戦争やっているから、今朝も見ました、タイトルが、ホロコーストの経験者が、この酷い事をやる」

水島「今、そう言われていますよね」

シュラー「言われていますよ。やっぱり段々ニュースにも出ているから、特にガザの病院の手術中の医者さんとか患者。イスラエル軍が駐車場に連れて行って、パッパッパとかやりまして。それも、やっぱり疲れている。前にウォルツと言ったっけ、向こうのナショナル・セキュリティ・アドバイザーね、それもトランプの怒りになりましたよ。やっぱり、はっきりアメリカを裏切っているよ。まあ、アメリカは本当に二つの国籍は駄目ですよ。だから、私は日本籍になると、アメリカ籍を捨てなければならない。

でもね、イスラエルが二つ、アメリカとイスラエルとかね。結構、そのイスラエル賛成とマイク・ウォルツがネタニヤフの為に自分のナショナル・セキュリティ・アドバイザーって、だから、そのクビのやり方をしまして、今回はイスラエルには行かないでサウジへ行ってというのは、本当にメッセージですよ。本当にイランの方が核を欲しくないみたい」

水島「うん」

シュラー「アヤトラの方が行きませんっていうの、まあ、そういうファクトワっていうの、法律を出しているんですからね。だから、アメリカもつくって欲しくないとか、それで何とかできるんじゃないかな。でもネタニヤフは、どうしてもアメリカを引っ張り込んでイランと戦争しましょうとかね」

水島「それは、ずうっとやっていますね」

シュラー「ずうっとやっていますよ」

水島「はい」

シュラー「本当にイスラエルの寺の方に、そういう犠牲にする牛も準備してる。真っ赤な牛とか色々急進的なユダヤ人が、そういうのをやると、勿論、アラスカモスクを潰して、中近東が大混乱になるんですよ。もう疲れていますよ」

水島「そうですね」

シュラー「疲れていますよ。だから、アメリカでイスラエルの評判が段々悪くなっている」

水島「今、そうですねえ。はい、有難うございます。山下さん、どうですか」

山下「はい。今、イスラエルの核の保有については、国際機関が出しているのが、高濃縮度ウランが300キロですかね」

水島「うん」

山下「それから、プルトニウムを900キロ持っている。これは、もう判っていると。それから推測されると、70から80発の核弾頭を持っているんじゃないかと。当初から手段は持っていますね。ミサイル弾道弾を持っていれば航空機も持っていますから、もう、その中で、今、マックスさんが言われたように、アメリカからすると何かコントロールが非常にし辛いと」

水島「うん」

山下「核兵器を持っている。イランが核の開発を進めると爆撃するぞ、みたいなことを

言っていますから、そのまま行くと、先程、言われたように火がつくと。これを抑える為にはアメリカとイランが、また交渉開始しましたけども、それでイスラエルを抑えられればいいんじゃないかなっていう風に、トランプさんが本当に思っている訳ですね」

水島「うん」

山下「先程、エルドリッチさんがアメリカ国内の政治的な部分を色々説明されましたけども、それとサウジに行きましたよね。サウジに行ったものの、まあ、一般的な報道だと、ムハマド皇太子と非常に仲が良く、アメリカの投資を入れる為に、サウジアラビアに行きましたと。あんなことを言っていますけども、実際は、本当にイスラエルに対して、こう、まきながら、あまり、これ以上、攻撃を広めないようにやっているのかですね」

水島「うん」

山下「果たして、そこまで考えて行かれたのか、経済的な頭で行かれたのか、ちょっと私には解らないですよ。あまりにもトランプさんのブレ幅が激しいので、中々本音が判らない。そこはエルドリッチさんは、解っているんだと思うんですけどね。その辺…」

水島「ただ、私ね、35兆円ですか、ディールで取引が出来た。カタールも31兆円ですか、取引が出来た。それから何処だったかな、ドバイでしたか、ちょっと場所は間違えたら、ごめんなさい。トランプタワーを建てる。日本のメディアは、これを批判しているんですよ。自分の飛行機を、またプレゼントされたとかね。

でも、これってアラブ側から見たらトランプタワーが建ったら、それで安全保障になるっていうね。そういう感覚というものを、彼が現実主義者なので、そういうのがあると思うんですよ。だから今、おっしゃるように、振れ幅が大きいから何処が本音で何処があれっていうね。

ただ、結果を見ると、中国とああいう風にやったのかとかね。う～ん、相当、プロレスが大好きな人でしたからね。今、芝居をやっているけども、流れはとにかく中東に戦争を起こさせたくないっていうね」

山下「そうですね。うん」

水島「この流れは、やっぱり、あるんじゃないかっていう気はするんですけど」

山下「あの地域で最も重要な基地は、カタールの空軍基地ですよ。あそこに米空軍の中央軍司令部が何かがあって、イランをガーンっと見ていますから、軍事的に言えば、あそこが非常に要になりますよね」

水島「そうですね。中心になりますよね。山口さん、改めて、この問題はどうですか」

山口「えーと、ですね、何から言えばいいかな。まず、アメリカとイスラエルっていうのは、もう血の同盟と言われて…」

水島「うん。ほんと、そういう…」

山口「これは、例えばマニフェスト・デスティニーとかね、国が背負っている歴史が酷似しているという部分があって、私達が先住民を追い出したり殺したりしたのは、正当性があるんだという、簡単に言うと、めちゃくちゃな論理を立てている二カ国な訳ですね」

水島「うん」

山口「それなのに何故、バイデン政権とトランプ政権がネタニヤフ政権に厳しいか。これは全く違う理由です。バイデン政権がネタニヤフを毛嫌いしたのは、イスラエルを毛嫌いしたんじゃないくて、ネタニヤフ個人を毛嫌いしたんです」

水島「うん、うん」

山口「これは色んな理由があるんですが、簡単に言えばネタニヤフは何回も首相をやっているんですけど、クネセトというね、イスラエルの国会で、真のユダヤ人は、みんな、イスラエルに来るでしょって何回も言っているんですよ。これ、イコール、アメリカに残っ

たグローバリスト・ユダヤのユダヤ人を敵に回す発言をしているんですね」

水島「うん」

山口「ただネタニヤフっていう人は、リクードという政党のリーダーとして首相を何回もやっているんですが、要するに、この勢力、別にイスラエル国家の建設の為にテロをやったり、非常に強硬な、まあ、前身は極右と言われたテロリストだったりすることもあるんですね。そういう非常にナショナリスト・ユダヤ、或いは、シオニスト・ユダヤの代表がネタニヤフ」

水島「そうですね」

山口「そうすると、グローバリスト・ユダヤという、まあ、簡単に言うと、ディープステイトですね。それにコントロールされているバイデンとしては、ユダヤ人同士の近親憎悪として、ネタニヤフが大っ嫌い。だからガザ戦争が起きた時も、当時の国務長官とか軍の人はネタニヤフを首相の座から引きずり降ろすって平気で言っていた。それはネタニヤフ嫌いだったんですね。ところがトランプは、第一次政権の時にはネタニヤフと実は非常に関係が良かったんです」

水島「うん」

山口「今回、嫌いじゃなくて忌避している。これは、何故かと言うと、ネタニヤフ政権が駄目だからです」

水島「うん」

山口「ネタニヤフ政権っていうのは、ガザ戦争の時に戦時内閣っていうのを創ったんだけど、本来はそこに極右政党、まあ、簡単に言えば全部、極右なんだけど」

水島「まあね、そういうことですよ」

山口「ただイスラエルの場合は、世俗主義政党と宗教政党、正統派宗教政党と二つあるんですけど、今、そのイスラエルのネタニヤフ政権を支えているのは、宗教シオニストっていう政党と、ユダヤの力という世俗主義の超保守派、超強硬派。もうイランとパレスチナ人を皆殺しにするというような政党と組んじゃっているから、要するにネタニヤフの今の政権の枠組みでは、中東が平和にはならないんですね」

水島「そういうことです」

山口「ガザ戦争もやめないどころか、イランにも、例えば遠心分離機に平気で空爆する国ですから、そうするとトランプは戦争をしない大統領として、中東を和平に向わす為に最初の訪問国にサウジを選んで、イランとも核の交渉をして、これ、皆さん、注意して戴きたいのは、5月13日にはシリアの制裁を全面解除しているんです」

水島「解除。それも、わざと官僚は知らなかったというようなことだけどね。あれ、知っているに決まっているんだけど、でも、そういうアピールしていますもんね」

山口「ということはね、正直言ってトランプ大統領の政策は全くブレていないと、僕は思うんですね」

水島「うん」

山口「戦争をしない」

水島「うん」

山口「戦争をしたら儲かる軍産共同体に操られていたバイデンとは違うんだ、という明確な立ち位置の中で戦争をしないとすると、今のネタニヤフ政権は戦争をやめられない枠組みの、まあ、宗教シオニストと言っても極端に戦争大好きで、背後にCIAが居るって言われているんですね。

そうすると、トランプ政権としては正にイスラエルについていっても、ディープステイトとの戦の中で宗教シオニストとユダヤの力を枠組み的に切れないネタニヤフとは暫く、ち

よっとお話し出来ませんと」

水島「うん」

山口「それから、このC I Aと組んでいるイスラエルの政党は、実はアメリカ国内のシオニスト・グループと強烈に連携していて…」

水島「そうですね」

山口「シュラー小林さんがおっしゃっていたように、物凄くトランプ政権に圧力をかけているんですね。それでエルドリッチさんも、さっき言っていたけど、トランプ政権の中にもユダヤ人が何人も居ますから。娘婿がユダヤ人ね」

水島「そうですね」

山口「ユダヤ教ですから、そういう意味ではシオニストだけど、グローバル・ユダヤという謎めいた集団でアメリカの中に居る。これが圧力団体として、トランプ政権に強く色んなことを言って来て、ある意味、頭にきちゃったというのもある。

そういう意味では、DNA的にネタニヤフを嫌っているイコール、ナショナリスト・ユダヤを嫌っているバイデンと、戦争を継続したいネタニヤフ政権を嫌っているトランプとは質的に違う」

水島「そうですね」

山口「憎悪と忌避の大きな違いがある。そこさえ抑えれば、実はトランプ政権の中東外交、それからウクライナ和平も実は全くブレていないんですね」

水島「うん」

山口「実は戦争をやめさせる。起こさせない」

水島「うん」

山口「中東を平和にして、アメリカの総力を中国に向ける。実はシンプルだと僕は思っているところですね」

水島「まあ、全くねえ、そういう感じも解ります。だから、今言ったバイデンとの違いの中で言うと、昨日、ハマスの新しい最高指導者っていうのが爆撃で殺されたっていう噂があるでしょう。そうすると、やるだけやってネタニヤフはやることやりましたよっていうことで辞職するとかね、何処まで行くか分からないけど、おっしゃるようにね。

そうなると、中東のイランとかサウジとか、色んなものは収まる可能性が非常に高い。だから、ちゃんとネタニヤフの引き時とか色んなものを考えているんじゃないかって、今、お話を聞いていてね。うん」

山口「それでネタニヤフが辞めた先に誰になるかが一番、大事ですね」

水島「まあ、そうですね」

山口「例えばハマス、殺されたのはテヘランで殺されているんですよね」

水島「うん。そうです」

山口「あれ、考えたらペデシュキアンという対話を中心として進めているイランの新しい大統領の就任式の時に、ハマスのリーダーがテヘランで殺されてる」

水島「うん」

山口「これは今回のガザ戦争と一緒にです」

水島「そうですね」

山口「ペデシュキアンとハメイニが強硬に出ざるを得ない形に追い込んでいったのは、正にディープステイトとイランの革命防衛隊ですね」

水島「そうですよ」

山口「今回のガザ戦争も革命防衛隊が起こしたものですから、だから、この人達がC I Aと組んで、中東を憎悪と戦争の地域にしちゃっている」

水島「うん、そうですね」

山口「だからトランプは第一次政権の時に、イランの革命防衛隊のクオッズっていうところの司令官を爆殺しているんですね」

水島「う〜ん」

山口「だから、やっていることは凄く一貫性があるんですよ」

水島「今、丁度、指摘があったように、革命防衛隊っていうのは、イランの革命防衛隊になっていますけども、ちゃんと、そこにC I Aとの関わり合いがあるっていうね」

山口「その革命防衛隊の中の対外交策部門イコールC I A、これがクオッズと言って、これはC I Aが育てた組織です」

水島「そういうことですね」

山口「ということは、バイデンとオバマの後ろで操られて戦争をずう〜っと継続する為に、例えばガザ戦争」

水島「うん」

山口「例えばハマスのリーダーの爆殺」

水島「うん」

山口「全部、彼らがやっている訳ですね」

水島「イラクで、丁度、革命防衛隊の司令官が爆殺されたのは、トランプでしたっけ」

山口「そう。トランプしか出来ないと自分で言った」

水島「だから今の説明がピットと適合するっていうことですけどね。それとアメリカの福音派もね、イスラエルについては根強い支持だから、そう簡単にトランプ政権が放り出す訳にはいかないっていうね」

山口「いや、絶対に放り出さないです。だけど、今は、ちょっと、あんた達、大概にせえよと。総選挙があって、所謂、和平派が、その連立を構成出来るようになったら、トランプは、別にネタニヤフでいいんですよ。ネタニヤフ個人が嫌いな訳じゃないから」

水島「シュラーさんは何かありますか。はい」

シュラー「一つ、今朝、見ました。ガザのハマスについて。イスラエル軍が発表しているのは、他の方は75%ぐらい残っている」

水島「えっ、何？」

シュラー「他の方。このハマス戦の他の力が、未だ75%あります」

水島「トンネルが…」

シュラー「ハマスの兵士の数は4万人」

水島「うん」

シュラー「ゲリラ戦が大体10対1か12対1で考えられる。だからイスラエルが戦う為に4万人だったら40万人が必要」

水島「そうしたら中々収まらないですね」

シュラー「ね」

矢野（義）「全然、侵攻していないです」

シュラー「全然、侵攻になってないです」

水島「侵攻していないんだね」

シュラー「ね」

矢野（義）「虐殺しているだけです」

水島「これだけやって、住民を殺しているだけになっちゃっているもんね」

矢野（義）「そうです」

シュラー「そうですね。リーダーだけ殺しても、どうしようもないですよ」

水島「ねえ」

シュラー「うん」

水島「あんまり、いや、あんまりじゃなくて全くいいやり方じゃないですけどね」

シュラー「ね」

水島「ただ彼らは、やり方を考えられないんでしょうね」

矢野（義）「出来ません」

水島「はい。そういうことで、エルドリッチさん、エルドリッチさん。今、ずうっと、このイスラエルとその問題を話していましたが、エルドリッチさんはどういう感じで見ていますか、先程、問題提起して戴いた方なのでね。どうでしょうか。聞こえているのかな」

エルドリッチ「すみません、ちょっと電波が悪くて…」

水島「あ」

エルドリッチ「全部、聞き取れなかったんです」

水島「あ、そうでしたか。もう一回、言いますね。今、エルドリッチさんからの問題提起で、イスラエルとトランプ政権のね、最終的にはどこら辺を目指しているかが今、中々見えないんですけども、今の皆さんの話を聞いてエルドリッチさんはどう思われましたか」

エルドリッチ「うん。有難うございます。多分、意見が山口さんと似ているとか重なっているんですけども、このトランプ政権が誕生した時に、私は少なくとも4つの対外政策を優先的にするんじゃないかと思っていて、その一つがウクライナ戦争。その次が中東平和政策だった。彼が一期目の時から中東全体の平和プロセスをやろうとしていたんですけども、政権が結局、中断された。二期目が直ぐ始まらなかったの、彼は多分、それを復活したいと思っている。けども、その間、大きな問題が発生した。これがガザ紛争」

水島「はい」

エルドリッチ「本来難しい中東の平和プロセスに加えて、ガザの問題。さっき山口さんがおっしゃったように、今のイスラエル政府は、和平を全く目指していない。物凄く邪魔しているので、これがトランプにとって、やはり納得できない。許せない状態だと思っている。しかもアメリカの普通の国民、殆ど、このガザ紛争は許していない。認めていない」

水島「うん」

エルドリッチ「だから、トランプが従来の平和プロセスの復活と…本来ならば、彼は、イスラエルと各国の和解も目指していたと思うけども、イスラエルが自ら可能性を邪魔している」

水島「うん」

エルドリッチ「だからトランプは、それを条件に今、していない」

水島「うん」

エルドリッチ「だから、今迄のやり方と違った交渉を多分、すると思うんですけども、目標、その中東の平和は多分、変わっていない。でも道が、ある道が遮断されてしまったから…」

水島「なるほど、はい」

エルドリッチ「違う方向でやらないといけないと思うようになっているんじゃないかなあと思う」

水島「そうですね」

エルドリッチ「ご存じのように、とにかく彼は Deal Maker で取引が好きな人で、両方が納得する WINWIN を、彼が多分、各国との間で目指す」

水島「はい、そうですね」

エルドリッチ「イスラエルの言いなりになりたくないのかなあという風に思います」

水島「そうですね。はい。まあ、これは本当に…」

用田「ちょっと、いいですか」

水島「はい。どうぞ」

用田「多分、今の皆様のご説明に、私も納得するんですが、これを見たら、一番、よく解るのは大イスラエル構想ですね」

水島「はい」

用田「皆さん、御承知の通り、大イスラエル構想の、エジプトも含んで、それからサウジでしょう」

水島「はい」

用田「イラクでしょう。それからシリアでしょう」

水島「はい」

用田「今回、杭を打っているのは、シリアに対しては、山口さんがおっしゃった通り、アメリカの懸賞金のかかった大統領か首相ですよ。要するに、その制裁をそのまま解除すると」

水島「そうなんです」

用田「よく聞いたら、とんでもない話だなあと」

水島「会談しているんですよ」

用田「でも言っている事は、トルコと調整しているからだと、こう言っている訳ですよ。だからトルコとしても、これ以上、シリアの方からイスラエルが駆け上がって来ると言うことは望んでいない訳ですね」

水島「うん」

用田「それ以上に、今回、サウジまで行っていますけど、サウジの北半分を取るような、こんな大イスラエル構想なんて惚けるなど。そろそろ手の打ちどころだろうって言って、イランをやってしまうと、この辺の和平がガタガタっと崩れてしまう訳ですね」

水島「そうですね」

用田「だから、私がこれを見た時、とんでもない考え方だなとか思ったんだけど、実際にやっているのかよという風になると、やっぱり止めなきゃいけない時に来ているんだろいうなという風に…」

水島「やっぱりヨルダンもね、この間、空爆していますからね」

用田「はい。ただ私も保証の限りで言えないのはガザ、それからヨルダン川の西岸の地区ですね」

水島「はい、西岸地区ですねえ」

用田「この地区の人達はパレスチナ二国論を、トランプが言えないと、ここは本当に民族浄化されてしまう、分らんという」

水島「だから一時、トランプはあれだったじゃないですか。あのう…」

用田「リベラリストみたいな話でしょ」

水島「そう。エジプトとか色んな所に、ガザの人達を移動するっていうね」

用田「ええ」

水島「イスラエルの案に、結構、一回は乗ったような形になっていましたからね」

用田「今、越境3.0の石田さんが言うのは、ソマリランド、あっちの方に国家承認する可能性も…」

シュラー「インドネシアも言っている」

用田「ああ、インドネシアも、ちょこっとですね」

シュラー「ね」

用田「そこに送ったらっていう話があるけども、さあ～、それは実現しないんじゃない」

水島「そう簡単にねえ（苦笑）」

用田「だからハマスを引き抜くという話と、ガザの人達を移住させないで、また定着させるという話と、まだ、そこは根っこが深いところがあるけれども、しかし、これ以上、戦争は広げたくはないというメッセージは、しっかり送れると思います」

水島「うん。それは、みんな、あるんでしょうけど、つまり…」

矢野（義）「アメリカが軍事援助をやめりゃいいんですよ」

用田「そうそう、そう」

シュラー「そうそう」

矢野（義）「イスラエルなんか戦争が出来ない」

用田「ウクライナのと一緒です」

水島「それは一発で終わりですからね」

用田「ウクライナのも一緒。軍事援助をやめて情報をやめれば終わりです」

水島「うん。だから最終的にはそれを握っているんですよね」

用田「そうです。握っている訳ですよ。しかも、バイデンの戦争っていうのが、今、トランプの戦争だって言われている訳ですね」

一同「（苦笑）」

矢野（義）「このままでいったら、そうなる」

水島「はい。まあ、ということで、今言ったそういう根本の事を、ちゃんと皆さんが知っているよね…。一回、お休みして、先程、冒頭に出ました東アジアですね。我々の日本のことですけれども、色んな問題が大変なもんだということですけども、中国が、我々の見方から言うと、ミアシャイマーとかも含めて、中国の習近平政権が替わるかも分からないけども、中国共産党の体制は変わらない。

それから軍事力の強化。そういうのは、どんどん膨張していくだろうと。こういうことは、この現実として我々は認識しなきゃいけないかも知れない。この辺も、また、違う考えがあったら、お話し戴きたいんですけど、東アジア情勢について、今度は、皆さんとお話したいと思います。一回、お休みします。宜しくお願いします」

一同「（礼）」

<後半>

水島「後半になりました。後半は、前半の中東その他のウクライナじゃなくて、東アジアに行ってみたいと思います。韓国は今、大統領選とか色んな形で混乱の極みになっています。それから今、言ったように北朝鮮はロシアとカッチリくっついたというようなこと。そして我々の国の尖閣諸島は、さっきお話した通りでございます。今、一番の中心は、やはり中国。フィリピンとのぶつかり、ベトナムともぶつかる。

こういうような状態の中で、拡大しているということですけども、それと台湾有事っていうのが意見は分かれましてね、ずうっとってはいるが、台湾の中にどんどん中国が浸透していると。まあ、日本もそうですけど、そんなに急がないんじゃないかと。ただ習近平の地位が危なくなると、思い切ったことをやるかも知れない。それは海上封鎖ですね。

周りを封鎖して食糧、油、こういうのを全部ストップさせると、この間、どなたか言っていたけど、戦争をしなくても台湾は一か月ぐらいで干上がってしまうと。日本もそれと同じようなことをやられるかも分からないんですけども、こういう意味で今の東アジア情勢を、どう見ているか。皆さんに提起を載いて議論してみたいと思いますけど、時間が1時間弱しかないので、コンパクトに、それぞれご発言を載きたいと思います。じゃあ、矢野（義）さんからお願いします」

矢野（義）「侵攻予想と言うか、その目標ということで言えば、まず、周辺諸島だけ取るという一つあると思うんですね」

水島「はい」

矢野（義）「それから、あのう…」

水島「金門島とか」

矢野（義）「そうですね。或いは、澎湖諸島とかですね」

水島「ああ、はい」

矢野（義）「あと封鎖をする。これも海空封鎖とか方法はあると思うんですが、それと航空攻撃かミサイル攻撃だけで屈服させる」

水島「なるほど」

矢野（義）「最終的には着上陸侵攻をして、それも局地的な侵攻をするのか、それとも全面的に台湾全土を占領するかというのがあると思うんですけどね。まあ、そういうフェーズがあると思うんですね」

水島「うん」

矢野（義）「あと、より大きく言えば軍事侵攻を使ってやるか、それとも、非軍事的手段を使用して、言われたように政治併合とか、或いは、世論とか政治工作ですね」

水島「はい」

矢野（義）「こういう非軍事的手段を駆使してやると」

水島「うん」

矢野（義）「それから、あとサイバーとか宇宙とか、そういう新領域も中心にやるとかって色んなやり方があると思うんですが、最終的に併合するという目標自体は、国土の統一ということで第19回の党大会の時からでも、習近平が自分自身の任期制延長の一つの正当化の為に言っている大目標ですから…」

水島「そうですね」

矢野（義）「それから今世紀、中頃迄にアメリカに並ぶ世界一の軍事大国、建設することも言っている訳ですね」

水島「言っている。はい」

矢野（義）「ですから、その過程の中で台湾併合っていうのは必ず出て来る訳で、それをどうするかっていうことは、もう方法があるにしても、一番いいのは、非軍事的手段なんですけれども、しかし時間が無いと」

水島「うん。国内事情でね、はい」

矢野（義）「例えば国内で権力基盤が揺らいで来るというようなことになれば、或いは健康状態とかもあるかもしれません」

水島「はい」

矢野（義）「そういう不可測状態で時間が無いとなれば、蓄積した軍事力で一気に決着をつけるとい、そういう誘因は高まって来ると思います」

水島「はい」

矢野（義）「そういう意味で、今、中国の情勢を見ていると、軍に対する掌握というのは弱

くなっている。つまり歴代三代の国防大臣、国防相が、みんなクビになっている訳ですよ。それから内部でも権力闘争が激化していて、太子党とか極左勢力の毛沢東主義者の勢力も強くなっている」

水島「うん」

矢野（義）「それから国内的にも色んな不満分子とか、それから若者の失業問題とか格差の問題もあって、やはり中国内政自体はアメリカの締め付けもあり、国際的な環境も悪化している」と

水島「うん」

矢野（義）「孤立化が進んでいる」

水島「うん」

矢野（義）「かつての、2015年頃までの高度成長はあり得なくて低成長で、しかも少子化も進んでいることで、時間と共に中国の総合力も低下していくと。こういう風なことを考えると、やはり、いつまでも熟柿のように政治併合が出来る状況をつくっていく状況でもない。そうすると国力の衰退と、それから軍事力の蓄積、効果と、それと台湾側の準備ですね。日本の準備もあります」

水島「うん」

矢野（義）「2027年以降、日本も本格的に軍備、戦力が伴ってきますから、そうすると、それまでの色んな総合的なパワーバランスを考えた時に、やはり2027年頃を一つの大きな転換点として…」

水島「じゃあ、再来年ですね。はい」

矢野（義）「それまでに、何らかの行動を起こすという可能性が高いんじゃないかと」

水島「はい」

矢野（義）「従って、それが最終的に一気に台湾併合に行くのか、或いは、例えば、日本の尖閣の様な弱点を突いて、まず局地的な既成事実をつくり、次のステップとして台湾に圧力を加えると」

水島「うん」

矢野（義）「或いは国内での権力基盤を再度、強化すると。そういう口実に使うかですねえ」

水島「なるほど」

矢野（義）「そういった色んなシナリオを考えられるんですけど、いずれにしても時期的には必ずしも中国にとって時間は味方じゃないので、そのピークを考えると、やはり、ここ2～3年が勝負だという風に思います」

水島「なるほどね。でも、その時、尖閣に来てやられたら、さっき言ったように、今、日本は、あまり手を出せないでしょ」

矢野（義）「だから専守するというので、先に自衛隊をあげるというのが、一番いい方法です」

水島「それが一番の方法でね…」

矢野（義）「それが出来なければ、統合作戦やるしかない」

水島「やられますからねえ」

矢野（義）「はい」

水島「はい」

矢野（義）「かなりの犠牲が出る」

水島「うん、出ますねえ」

矢野（義）「それと問題は、核の恫喝がかけられるということです」

水島「まあ、かけますよね」

矢野（義）「はい。間違いない」

水島「はい。用田さんはどうですか、はい」

用田「はい。シナリオは本当に腐る程、いっぱいあると思うんですよ。だから、どれでいくかっていう話は色々あるかもしれんけども、私が今、思っているのは、ウクライナの紛争を見ながら、中国は戦い方を変えているという、それは先程、矢野（義）さんがおっしゃったように、軍隊に対するグリップというのは非常に弱くなっているし、粛清もしているし、こんな状況だと普通だったら戦争は出来ないですよ」

水島「なるほど」

用田「でも、いや、出来ないという言い方は断定的で、それでは良くないんですけども、やり難いだろうなと」

水島「やり難いけども…」

用田「もう一つは基本的に今、ロボットとかドローンとか、それから、所謂、そのAIを使って、中国ではドローンをロシアにもウクライナにも両方やっているという世界があるので、戦争をやりながらバージョンアップっていうのが凄まじいんですよ」

水島「うん、そうですね」

用田「それと合わせて、電子戦というやつも一緒に含めてやっている訳ですから。この前、ロシアの方がロシアの無人機を何処にどう動かすかという情報を全部、取っていた、その盗られたやつを全部、パッと消してしまったと」

水島「ああ」

用田「サイバー。サイバーですよ。それがアメリカ本土に対しても及んでいる訳ですよ」

水島「ああ〜」

用田「中枢、NATO司令部だけじゃなくて、アメリカの、まあ、だからサイバーだから別に基本的に国境がありませんから…」

水島「ああ、そりゃそうだよねえ。それで把握していたんですね」

用田「ええ。だから物理的というよりも基本的にそういうものが当然、相当、表立って来るだろうなというのと…」

水島「まあ、そうだね」

用田「台湾自体の政権は、完璧に議会が安定していないですよ」

水島「そうですね」

用田「昔から、あまり言いたくはない部分はあるんだけど、何処まで台湾軍が本気でやるのかっていう世界は、まあ、信じられないっていう言い方をしてしまったら、おしまいなので、信じて一緒にやるのかなっていう世界はあるんだけど、いずれにせよ、戦い方は、ロシアとウクライナの3年から4年の戦い方を、こういうシナリオで、こういう風に動いたということを、最初から正確に言い当てた人は一人も居ないと思うんですよ」

水島「うん」

用田「私も間違えました。全体的に間違えたっていうのは、大きな枠組みは矢野（義）さんと一緒ですけども、基本的には変わっていないけども、所謂、戦闘だとか状況の中で、戦闘要素というのは随分と変わった。そこまでは追っかけ切れなかったという部分はある訳です。だから、今回、この次に台湾で起こる事も基本的に何か画を描いたから、その通りに行くかと思うと、それは絶対にいかない」

水島「うん」

用田「C S I Sがやっているけども、あれは核の話が入ってないし、基本的に、自分が、こうもっていききたいという話にもっていき訳ですね」

水島「うんうん」

用田「だから、そこは、いや、何を言っているかと言うと、要するに台湾有事というやつは、基本的に根本的には日本が戦える体制をしっかりと執らなきゃ話にならんと。例えば封鎖されると。海上封鎖をされるといった時には、日本に対しても封鎖はかかっている訳ですから」

水島「勿論、そうですね」

用田「ということは、それを封鎖、第二次大戦の時と一緒に、A B C D包囲陣は戦争だと」

水島「うん」

用田「経済封鎖をかけたことは戦争だと」

水島「うん」

用田「やはり自分で決断をせなきゃいかんのですよね」

水島「そうですね」

用田「その時に、その封鎖を破らなきゃいけないんですよ。それは全面的に戦うことになるんだけど、船を沈めろということに、まず、第一義的にはなるんだと思うんですね。だから、私は全然、政治的なことを考えなければ、台湾に対して圧迫するのは澎湖諸島、それから東沙、そして与那国」

水島「うん」

用田「これを抑えれば、三点を抑えられてしまうと、だから我々は決して傍観者ではないと」

水島「いや、全くそうですね」

用田「だから、要は、日本は今、戦える体制にない。軍隊でもない。何も無い何でもないと。だから、どんなことがあったって何を話したって、こういう世界から早く脱却しないと（失笑）」

水島「そりゃそうですね」

用田「話にはならんという世界ですね。だから、もう一つ、トランプが言っているのは、中共を倒せて言っているんですね。前からご承知の通り、バイデンは習近平を倒せと言ったんですね。その残ったやつは全部、経済的にグローバリストだから戴きだと。でも、今、トランプは中共を倒せて、中国人とは違うと言っているんですね。ということは、内部工作とか、そういうやつも相当、あるだろうなと。それから今回の関税も、そういう影響が物凄くあるだろうなと」

水島「まあ、そうでしょうね」

用田「だから、もうちょっと半年から1年、いや、もう、こっち側に振り向けるぞという準備しているんだと思うんですけども、どういう手を打って来るのかなというのは、ちょっと予測は出来ませんが、そこのところは、やっぱり考えてみないといけないのかなという風に思っています」

水島「解りました。一応、皆さん、知識の問題ですけど、尖閣諸島は、台湾が自分のものだと中華民国として言っているってことです。だから、それは台湾が取るか、中共が取るかとは別として、そして基本的に台湾は大きな意味で中国のものと思っているっていうね。だから、どういう反応するか判らないですよ。それは武力の現状変更については起こるかも分からないけど、台湾自体がそれを支持するかも分からないっていうね。中共もやったら、ということも、だから、あの場所が一番、やり易いっていうね（失笑）」

矢野（義）「中華紛争が起こっても、台湾が島外の進出を抑える為に尖閣を盗るという可能性も充分、ありますよ」

水島「はい、そうですね」

矢野（義）「無人のままだったら」

水島「それと、よく石垣とかやられて、みんなで言っているのは、あそこを取られたら、台湾の人も、もう諦めるんじゃないかと、中国にね」

矢野（義）「うん」

水島「まあ、日本も盗られちゃうんだから、台湾に攻めていく以上、もう戦うんじゃないかねえよってね…」

矢野（義）「だから極めて重要なんです」

水島「そうですね、心理的な意味でもね」

矢野（義）「（頷く）」

水島「はい。有難うございます。では、矢野（一）さん、お願いします」

矢野（一）「はい。まず、今のトランプ政権が最大の競争相手というか、敵としているのは中国であると」

水島「はい」

矢野（一）「これは間違いない話です。彼らの経済力が伸長する限り、中国の軍事力は伸びていきます。経済力の無い軍事力なんか無いし、軍事力の無い外交力なんか無いです」

水島「うん」

矢野（一）「つまり、経済力を削ごうとしているのは間違いない。逆に中国の側から見れば、じゃあ、何がパリティならアメリカとの戦争に、台湾戦争はアメリカとの戦争になる可能性が高いと見ていますから、引き金が引けるのかと言うと、私は核と水中優勢だと思っています」

水島「うん」

矢野（一）「これが少なくとも均等になれば、海上侵攻した場合の後方連絡船が保たれるのであれば、台湾侵攻というのは現実味を帯びてくる。しかし、これはアメリカに圧倒的に傾いている現状で、台湾侵攻等、夢のまた夢だと」

水島「うん」

矢野（一）「私は思ったんです。通常の間人が考えるのであれば。これが自分の生命と国家の命運を一緒にしたような人間が出て来て、例えばプーチンみたいな」

水島「うん」

矢野（一）「メチャクチャをやるというんであれば別ですよ。しかしながら、恐らく、これは中国も考えているだろう。だから、さっき言ったようにプルトニウムの増産を急いでいると。核弾頭をどんどん作っている」

水島「うん」

矢野（一）「もう一つは、原子力潜水艦の建造能力というのは、急速に伸びています」

水島「ああ、中国の」

矢野（一）「はい。工場は2倍規模、3倍規模になっています」

水島「うん、うんうん」

矢野（一）「それから原子力潜水艦の基地の埠頭の数だとか、トンネル施設なども急速に充実されつつあります。それから、もう一つ、この間、皆さんも記憶にあると思うんですが、武昌の造船所で原子力潜水艦が沈没したというニュースが流れましたね」

水島「ありましたね」

シュラー「ああ、ありました」

矢野（一）「あそこの造船所は、原子力潜水艦なんか造ったことないですよ」

一同「ふう～ん」

矢野（一）「あれは原子力潜水艦じゃないんです」

水島「通常ですか」

矢野（一）「厳密に言えば、通常動力潜水艦に補助原子力推進装置を乗せているんです」

水島「ああ〜」

矢野（一）「はい。つまり、そういう潜水艦まで造っている。これは何故かと言うと、原子力潜水艦を造る能力は確保しなきゃならない。通常動力潜水艦も何とか原子力潜水艦に対応できるような装置を持った潜水艦を造ろうと。彼らが必死になっている水中戦力を、必死になって増強し始めたという証拠ですよ。

もう一つは、ネイバルニュースという欧州の軍事サイトにも載りましたが、いよいよ大型のブイを造って実験を始めていると」

水島「うん」

矢野（一）「とにかく急速に、核と水中戦力の差を埋めようとしているということは間違いないんです。これが、さっきも言ったように均等になったら、やれるチャンスは出て来るという風に考えていると、私は思っています」

水島「なるほどね」

矢野（一）「もう一つ、台湾侵攻に対しては色んな手があると言いましたが、その通りです。しかしながら、離島侵攻だけで台湾の本島に侵攻せずに終わるということは、考えられない」

水島「うん」

矢野（一）「離島なんか本島が落ちれば、熟柿的に落ちて来る訳ですよ。そこに態々危険を冒して侵攻して、その結果、何が起こるかと言えば、中国の本音が見えたなあと。台湾に対する支援は、世界的な支援がガァ〜ンと上がる」

水島「うん」

矢野（一）「米国もドカドカ台湾に支援しなきゃいけない。そうすれば台湾の防衛意識も、完全に中国戦があるという意識で上がってしまう。だから、離島侵攻で終わるということは、その状況をつくってやるようなもんですね。結局、離島侵攻が必ず次に本島に対する侵攻を引き起こす」

水島「予想させるものだからね」

矢野（一）「はい。間違いなく。もう一つは、中国と我々西側とで考えなければならないのは、グレーゾーン。我々は安易に台湾本島が海警の船によって経済封鎖された」

水島「うんうん、うん」

矢野（一）「海警の海じゃないか。グレーゾーンじゃないかと考えていますが、とんでもない話ですよ。グレーゾーンをつくらない。彼らは、我々がグレーゾーンで動けないということを知っている訳です。だから台湾にも言っているのは、海警だろうが軍艦だろうが、台湾本島が経済封鎖を受けると、台湾本島の危機状態であれば、これは戦争状態だと言えと」

水島「うん」

シュラー「うんうん」

矢野（一）「そうしたら、我々は防衛出動をかけることが出来るという風に、向こうの手に乗ったように何でもかんでも、いや、あれはグレーゾーン。グレーゾーンだから防衛出動は無い。そういうことにしては、向こうの術中に嵌ってる訳ですよ。ですから、そういう風なことで、何処が本当に危ないのか、本島が危ない場合には、これは戦争状態であるというような判断をするような基準を、ちゃんと我々の中と同盟国の間で作っておかないと、それはそれで初動対処が誤ることになるという風に私は考えています。以上です」

水島「今のお話は大事でね、実はアメリカの国防長官が、日本は、こういうアジアに起きた時は最先頭になって戦って貰うっていうね」

矢野（一）「ああ、勿論」

水島「そういう風に、言っている訳でしょ。ということは、今言った台湾の問題も、離島侵攻じゃなくて、もっと言えば、台湾本土や、さっき言ったように一番、やり易い尖閣諸島ね、こういうものをやって来る可能性がある。その時、いや、これ、矢野（一）さんに聞くのもちょっとあれだけど、日本の政治家が絶えず逃げて来た訳ですよ」

矢野（一）「はい」

水島「あの事なかれ主義でね」

矢野（一）「はい」

水島「そうすると、例えば、尖閣に上陸されてね、占領されても『許し難い暴挙』と言うだけで、抗議するだけかも知れない。自衛隊を送って戦って、上陸作戦をやる訳じゃないかも知れない。アメリカも今言ったように、あんたら、基本的に約束は日本の国が実効支配しているっていう状態を示した時、初めて安保条約で日米がやれるっていう、だから、さっき陸の矢野さんが言ったように今、やるべきことをやっておかないとね。結局、盗られちゃう」

矢野（一）「いや、事前に軍隊を送って防御態勢を整えるということだけが、必ずしも守るということじゃないと思います。それと、もう一つは、尖閣に侵攻された場合、日本が戦わなきゃ、アメリカは助けません」

水島「そりゃそうですよ」

矢野（一）「絶対に助けません」

水島「ええ、そう」

矢野（一）「日本が、まず戦って、それで撃退されるか、損害を受けるか分かりませんけれども、成功するかも。しかし日本が全然、戦わないのに、おーい、互譲事態だから、アメリカ、助けてくれって絶対、こんなことしてくれないです」

水島「全くその通りですね」

矢野（一）「日本が戦わなきゃ、尖閣は中国のものになるというだけの話です」

水島「そういうことだよ」

矢野（一）「はい」

水島「はい。その可能性が凄くあるっていうね」

矢野（一）「でも、私は、本土に侵攻されて…」

水島「本土ですよ、あれ」

矢野（一）「ああ、本土じゃない、まず自分の領土に侵攻されて…」

水島「ああそうか、あれは本土だと思ってた」

矢野（一）「これがグレーゾーンだとか、そんなことを言っている国は、まず考えられないと思いますね」

水島「う〜ん」

矢野（一）「否応なく立ち上がらざるを得なくなると」

水島「う〜ん。そう思うんだけどね、いや、本当におっしゃる通りですよ」

矢野（一）「はい」

水島「でも、そうじゃないかも知れないっていうねえ、可能性があるからねえ」

矢野（一）「それは確かに、可能性の話で言えば、そうじゃないかもしれないっちゃうことはありますよ。でもアメリカは必ず尻を叩くはずですよ。だってアメリカだって、今だったら勝てる訳ですから」

シュラー「うんうん、うんうん」

水島「ああ、いや、だからねえ、そういうことを解っていながら、いや、というのは、今、言ったように自民党の政権が、これまで、私なんか尖閣の事に関わってやって来た時、あまりにも情けないね、ずうっと事なかれ主義でやって来たんでねえ、また先送りするんじゃないか」

矢野（一）「ただ…」

水島「これは、台湾の人達に対しても、裏切ることになりますからね」

矢野（一）「はい。日本が、そういうことをやらなければ、日米同盟も終わります」

水島「うん」

矢野（一）「そして本当に日米同盟が終わっても、日本にいいんですかという話になって来ますから」

水島「うん。だから伊藤貫さんが言うのは、もう間違いなく10年後には、日本は中国のね、あのう、一種のね、属国になっているという風に言われて、中々ね、まあ、ということですけど、おっしゃることは非常に解ります。はい」

矢野（義）「尖閣が取られたら、国民は、どう判断するかですね」

水島「そうですね。いや、私は、とんでもないって思うけども、じゃあ、その自衛隊とか、そういうのを極めて慎重に外交的な努力で現状変更を、みんなで国際世論の力でとかね、言い出し兼ねないですよ、野党も与党もね」

矢野（一）「そうですね。だから、さっき言ったでしょ、ウクライナの戦訓を読み違えているんじゃないのかと」

水島「うん」

矢野（一）「そんなウクライナの国境線がどうなるとか、心配している時じゃねえだろうと」

水島「自分のところなんですよ」

矢野（一）「弱い国は、強い国の前に何も出来ないんだと。講和条件にすら参加できないんだという現実を見定めて、ちゃんと軍備を整備しろと。国内体制を整備しろと言っている訳です」

水島「そういうことですね。はい。シュラーさん、どうぞ」

シュラー「そうですね、やっぱり一番、危ないのは中国ですね。私の考えで、でも、どうしてもロシアと縁を組まないと。これは、まあ、アメリカが居るから軍事的にはならないけど、経済的にです」

水島「うん」

シュラー「特にシベリア開発とか何かね。これは中国の北の国、それとベトナム」

水島「うん」

シュラー「ベトナム、中国の南の国。それで、やっぱり、今、ちょっとしかやっていないけど、フィリピンの方と協力面とか何か色々な行いとか…」

水島「巡視船をプレゼントしたりしていますからね」

シュラー「ね。それと台湾でも、例えば、潜水艦の訪問、潜水艦で行って、日本の潜水艦とか何処か、例えば、台北、港は台北じゃなくて、あの近くの港だった」

矢野（一）「キールン（基隆港）」

シュラー「キールン。キールンの方に訪問するとかね。中国の前に、私達の潜水艦も行きますよとか。まあ、今、数は22隻ぐらいしかないけれど、でも、今、それは殆どクラスでしょ。半分以上ね。ちょっと対外クラスね」

矢野（一）「シュラーさんが言うように、退役潜水艦がありますね」

シュラー「うん。うん」

矢野（一）「再整備すれば、未だ使える訳ですよ」

シュラー「うん」

水島「そうだよねえ」

矢野（一）「うちは人も居ないけど、台湾に渡す事だって出来る訳ですよ」

シュラー「ああ～～～ね」

矢野（一）「うん」

シュラー「台湾は確か2隻ぐらいしかないですね」

矢野（一）「そう。今、2隻しかありません」

水島「それは本当にねえ。使わないなら」

矢野（一）「それって数百万で鉄屑にしている訳ですよ」

水島「それ、知っています。護衛艦もそうですよね」

シュラー「うん。やっぱり中心的に潜水艦。空母とか加賀とか恰好いいけれど、やっぱり潜水艦だと。将来は、それに集中するんですね」

水島「それと、やっぱり人材の育成ですよ」

矢野（一）「そうです」

水島「やっぱり5年ぐらい、かかるでしょ」

矢野（一）「潜水艦を渡すということは、その潜水艦の整備から人材の訓練から何もかも、こっちが握れるということですから」

シュラー「そうですね、そうですね」

水島「これが20隻、30隻って増えて行けばね」

シュラー「本当は60隻、欲しい（笑）」

一同「（笑）」

シュラー「自分の心の中でね。無理だと判るけど」

矢野（一）「でもアメリカも原子力潜水艦を増やすって言っているでしょ」

シュラー「うん」

矢野（一）「攻撃型を」

シュラー「ね」

矢野（一）「それから、今、あれですよ。AUKUSで、大急ぎで豪州の原子力潜水艦を造る能力をつけようとしていますね」

シュラー「アメリカ軍、結構、問題あるけれども、やっぱり潜水艦の方がまだ上手くいつている」

矢野（一）「それは、今のところ、もう無敵ですよ」

水島「そうですねえ」

矢野（一）「（頷く）」

水島「それとね、もう一つ、今、せっかく、そこまで来たので、前から、ずうっと言っているんですけど、これは転んでも、ただで起きない理屈だけでも、もし中国が尖閣諸島を占領するようだったら、我々は躊躇なくNPT体制を脱して核武装するって言うておけばいいっていう。口だけ言うなら出来るからね。そのぐらいの勇気も無いんですよ。

これは、私が、さっき言ったように、10年前の提案書にちゃんと書いてある。言うだけでも抑止力になりますよと。でも、私も本当に失望しているんでね、日本の自民党政権って、安倍政権からですね。残念ですけどね。ただ衛藤さんのことを名誉で言うと、一生懸命考えて、水島さん、経験から見た提案とか分析を出してくれないかって言って、やる気はあった。でも、実際は実行されなかったけど。はい。ということです」

シュラー「はい」

水島「では、山下さん、お願いします」

山下「はい。中国とかアメリカとか日本の話が今、出ましたけども、台湾を見ていると、私は退官して中国に2回、台湾に4回、行ったんですよ」

水島「はい」

山下「先月も4日間ぐらい行っていたんですけど、中国に行った時に、旅順の軍港を見る機会があったと。それから北京の装甲師団も見ました」

水島「うん」

山下「地下の施設、中共が防空施設にしているのも、ずっと見てきました。台湾は4回、行きまして、向こうでは立法議員の方とも議論したり、それからキールンから高尾、台南迄、全部、見て来て、海軍の基地も入りましたけど、やっぱり、台湾を、力をつけてやらないと駄目かなと」

水島「うん」

山下「今、国民党は、どう思っているかっていうと、金門、馬祖島ですか、あそこは防衛するって言っているんですよ。ところが民進党は、全くそこには関心が無いですから」

水島「うん」

山下「民進党って元々台湾の方々が立ち上がって出来た党ですから、元々台湾だった所っていうのは澎湖諸島までですよ。日本軍もあそこを占領して植民地にしていない訳ですから、そういう感覚も、ちょっと違うんですよ。だから澎湖諸島の軍事基地を台湾軍が強化していますけど、金門は、私、見て来ましたが、一人も兵隊を見たことがないですよ。ぐるっと見てきましたが、警察すらもほぼ居ないんですね。GPSはやられるんですよ。GPSで運転していたら全然、グルグルになって向こう側からやられているんです。だから金門島は、水も断たれたら終わりですから。大金門、小金門とあって…」

水島「いや、初期の頃に例の砲撃戦やったじゃないですか」

山下「もう、それは遥かに昔の話で、その当時は…」

水島「だから今、兵隊は殆ど撤兵しちゃっているから…」

山下「そうです、そうです」

水島「ああ～」

山下「小金門に一個大隊と金門本島に防衛指揮部がありますけど、恐らく全部、入れても、そんなには居ないですね、ガラガラですから。それを置いておいて、今、台湾自体は、国防部長は文民から顧さんという人がつきましたよね。今までは、軍人がずっと就いていたんですけど、頼政権からは文民から上げて、非常に兵隊からは聞こえがいいんですよ。足の上げ方をおかしなやつは普通通り歩けとかですね（笑）

一同「（笑）」

山下「兵隊、見せるんでやっている訳ですが、これ、何をやっているかって言ったら、古う～い考え方の軍を改革したいということですよ」

水島「うん」

山下「先程、言われたように、軍の形が、もう砲撃戦から変わっていないですよ。それを、彼が今、一生懸命、改革をしようとしている。だから頼総統が、アメリカが10%あげようって言いましたが、GDPを今、3%にしようとしているんです。野党の国民党が嫌がらせをして、それが中々進んでいない。それから台湾軍の人員が今、16万2千人なんですよ。それを21万5千人まで徴兵を伸ばしたりして上げようとしているんですけども、戦闘部隊の充足は78%ですよ」

水島「うん」

山下「陸上自衛隊も人のことは言えないですけども（苦笑）」

一同「（苦笑）」

山下「更に低いつてことですよ。だから防衛計画について、非常に古くてガラパゴス化しているので、アメリカが入ってその調整してバージョンアップしているんですけど、問題は、いざとなつて、アメリカ軍の方が仮に来兵した時の、共同の作戦計画も無ければ、共通のシステムも無いと。

それは勿論、同盟国が無いので共同訓練をやったこと無いですよ。まあ、そういうところは多分10年単位でかかるんじゃないかって言われていますね。陸上自衛隊が昭和60年から始めた日米共同訓練で何十年もかかって、やっと今、アメリカと足並み揃っている訳ですから、そう簡単に出来ない。そういう状況を見ると、台湾のレベルを非常に上げることが出来るかと。

キールンでフリゲート艦を見たら、アメリカから貰った古う～いのが浮いていましたよ。

波打っている奴で大丈夫かなと」

シュラー「（笑）」

山下「それから、あと台北から、新竹から、ずっと海岸線を見てみましたけど、もう壊滅的な打撃を受けますよね、あれ、上陸してくると」

水島「う～ん」

山下「台湾は。逆に海を見ていたら、中共軍も、渡って来るのは、ただじゃ済まないですよ。相当な冒険と決心をしないとイケないかなあと思いましたね。最後に、向こう側の参謀総長が本に書いていましたけども、日本側とは全くコンタクトが無いと」

水島「うん」

山下「だから国交が無いので、協定は結べるんじゃないかと。漁業協定みたいなのはですね。例えば、いざとなつたら海上自衛隊の艦艇と台湾海軍の艦艇が交信できるとか、共通の無線機を持って。そうでないと向こう側が誤射するって言っているんですね。台湾側が誤射すると」

水島「うん」

山下「間違つて撃つてしまうと。だから、そういうところから近づけて行って、日台の協力をもっていくべきだなあと思いますね」

水島「なるほど」

山下「それから先輩が言われたように、台湾はP3Cをアメリカから貰ったことがあるんですよ。そしたら運用やるのが判らないと。海上自衛隊のOBに来て、たまたま海上自衛隊のOBが、ある団体で向こう側に行く時に、P3Cの運用を教えてくれないかって言ったんですね」

水島「ああ～、そんな感じですか」

山下「そう、だから物を貰ってもソフトとメンテのところも一緒に持って行ってやらないと、売ればいいじゃないかっていうだけではいけないってことですよね」

水島「そういうことだよ。訓練とねえ、それは当然、要りますもんねえ」

山下「そうですね。だから、もう主役である台湾の軍事力をあげてやるっていうところを、やっぱり向けないといけないかなと思いますね」

水島「この間、新聞で世界軍事ランクつてのがあって、日本は6位になってたんですね」

シュラー「うんうん」

水島「勿論、アメリカが1位で中国とか。ところが韓国が5位ですよ。台湾が確かねえ、13位か何かかな。フィリピンが51位とか何かね」

一同「（失笑）」

水島「その辺に行くと、もう、あれですけど、今の話を聞くと、そんなもんで、かなり、ヤバイなあという感じがしますけどね」

山下「私の友人で現職の台湾の空軍少将とか居たり、或いは、行政府のところに幹部の人が居たり、しょっちゅう、お話ししたりしているんですけど、いずれにしろ、危機感を持って大改革しているのは事実です。さっきお話したように、ウクライナ戦争を見て、3千8百機のドローンを導入するとかですね」

水島「中国は大量にやってくるでしょうね。ドローン攻撃とかね」

シュラー「うん」

水島「まあ、ありとあらゆることをやるんでしょうけども」

矢野（義）「200万基もありますからね」

水島「ねえ」

矢野（義）「あのウクライナ戦争でね」

水島「う〜ん、ね」

用田「両方ですね」

矢野（義）「両方。両方に100万基ずつね。ロシアとNATOに」

水島「そういう時代が来ちゃって、ところで余計な話だけど、日本はドローンをどのくらい持っているんですか」

矢野（義）「いや、もう、殆ど無いでしょう」

水島「え？」

矢野（義）「持っているんですか（笑）」

一同「（苦笑）」

矢野（義）「第一、国内で規制が厳しくて、テスト飛行すら出来ないです」

水島「ああ、そう。ああ」

矢野（義）「電波規制もあるし」

山下「今、連隊クラスでドローン入っているんですけど、偵察用のやつですね」

矢野（義）「だから、攻撃型なんて、まだまだですよ」

水島「全く」

矢野（義）「無いでしょ」

山下「今からですね」

水島「ああ、そりゃそうですね」

用田「あんまり言いたくないけども、これは制服の責任じゃないんですよね。制服は基本的に、数を人だというのが解っている訳ですよ」

水島「うん」

用田「ところが、あまり、こう言うと、しっぺ返し食らうと可哀想だから言いたくないけども、予算を上げていく時に説明をすると、そんなの必要なんですかって、こうなるんですよ」

水島「ああ…」

山口「邪魔しているのは公明党ですよ」

用田「ああ」

水島「なるほどね」

山口「あれ、国交省だから」

水島「ああ、もう、それはよく解る、よく解る」

山口「それは空の関係で」

用田「電波とか、そういう関係で」

水島「しみじみ解るね、これ。ほんとに」

用田「対艦ミサイルがあるじゃないですか」

水島「うん」

用田「対艦ミサイルは、ずっと飛んで行くと、地球は丸いから200キロぐらい飛ぶと、見えなくなる訳ですよ。電波が通せなくなる。その間に船があちこち行かれると、舵を切らなきゃいけないじゃないですか。その電波の指令を出すのに、無人機を使うと話をした訳ですよ。

でも無人機を使うという話で、無人機を使うと言ったら、何処だとは言いませんけども、有人機で駄目なのと。ヘリコプターで、と言った。明確に覚えている。じゃあ、有人機で、お前が乗って行って1時間、パタパタ飛んで行って、まあ、30分ぐらい出来るかもしれんけども、天気の良い中、それで飛んで行って中継をやってみろと」

水島「ええ、いや…」

用田「基本は、そういうセンスですから」

水島「そう、だから…」

矢野（一）「センスと言うかね、考え方が違うんですよ。無人機を持ち出したら、私が現役の時ですけど、無人機を積みたいって言ったら、じゃあ、どの有人機を切るんですかと」

一同「(笑)」

矢野（一）「無人機を入れたら、人が何人減るんですかと言われて、そうしたら、ただでさえ少ない装備と人でやっている訳ですよ。じゃあ、やめますという話にならざるを得ないんですよ」

用田「まあ、少なくともウクライナを見て、基本的に頭を急速に切り替えた人間も居ますよ。居るんだけど、殆どが変わってない訳です。それは現役の制服だと私は言いたくない。それ以外の人達が、基本的に全く変わっていない訳ですよ」

水島「まあ、そうでしょうねえ」

山下「それは今、予算の方は、こう言っているんですよ、財務は、ドローンと見せるだけでいいだろうと言うんです」

用田「ああ、そういうこと(笑)」

一同「(笑)」

山下「そう言うと、大砲とか何とか全部、無くなるっていう訳で両極端ですよ」

用田「ああ、そういうバーターにする訳だ」

山下「そういうことするんです。もう、そんなの必要無いって言う訳ですよ。ウクライナの戦争を見てみる、大砲で撃ちあっていたらどうかっていう…」

水島「漫画みたいな話だけど、本当なんだね」

山下「本当ですよ。ドローンとミサイルがあればいいって言う、あ、すみません」

矢野（一）「そっちを入れるんだったら、何かをスクラップにしてくれという発想ですから、はい」

矢野（義）「そういう予算取りの話じゃなくて、戦略ですよ。数百キロまで、債務オフがとれる時代になったので、やはり今のウクライナを見ても戦場に到着するのに7割の戦車や装甲車がやられちゃうんです。家屋もみんな破壊されるんですよ。数千両単位で。それが実態で、戦闘の前に入れないんですよ。戦車砲で戦うような」

水島「なるほどね」

矢野（義）「そういう実態ですから今、アメリカもピート・ヘグセス（Pete Hegseth）が、もう全部、米陸軍の戦車、装甲車系列や、砲を生産や調達、全部、一回、止めて」

水島「ああ、ねえ…」

矢野（義）「それで根本的に見直せって大号令をかけている」

水島「ああ～

矢野（義）「だから海軍も空軍も、有人機とか大型空母の時代は、実際、もう終わっているんです。目標になるだけで戦力にならない」

水島「う～ん、まあ…」

矢野（義）「これが現実になっていて…」

水島「確かにウクライナ戦争を見るとね」

矢野（義）「これからは無人機と、それから小規模の機能性のある多数のプラットフォーム、そのネットワークの闘いになる。だから、そういう切り返しをしなきゃならない」

用田「それが基本だけど、私は戦車乗りだから、はいと言う訳にはいかないけれども（笑）」
一同「（笑）」

用田「いやいや、いや、やられるのはやられるんですよ。昔から、１００台あって１０台か２０台ぐらいしか目標に到達しない」

矢野（義）「費用対効果の問題があって、戦車１台、数億円のを、数百万円の攻撃型のドローンで突っ込まれて破壊されてるんですよ。乗員ごと」

用田「その通りです」

水島「（笑）」

矢野（義）「だから、もうねえ…」

用田「だけど…」

矢野（義）「世界は、もうゲームチェンジが既に起こっているんです」

用田「いやいや、ゲームチェンジは当然、必要ですよ。必要だけど、それだけでいいっていう話は今、さっき、出たけど、そういう話になっちゃうんです（微笑）」

一同「（笑）」

矢野（義）「だから、それ以外になると、今後は人型ロボットとかね」

用田「そうそう」

矢野（義）「それこそ犬型ロボットとかね、あと逆に言うと歩兵の時代ですよ」

水島「だから本当に消耗機の…」

矢野（義）「一番、生存率が高いのは今、オートバイですよ」

用田「そうそう、そう」

矢野（義）「その次はランドクルーザー。ウクライナ戦争で一番、生存率が高いんです」

用田「あ、でも、それに対する抵抗力は…」

矢野（義）「一番、弱いのは、実は戦車ですね」

用田「またあ（絶句）」

矢野（義）「いや、本当ですよ」

用田「矢野（義）さん、それは…」

矢野（義）「内輪の戦いであって…（笑）」

用田「矢野（義）さん、あとで、残ってから話しましょう（笑）」

山口「（笑）」

矢野（義）「実態を言っているんですよ（笑）」

水島「ウクライナ戦争を見ると、戦車の損耗って、多いけども、現実には占領とかになると、そういうのが必要になって来ると…」

矢野（義）「攻撃する時でも歩兵をね…」

用田「それでやられても、目標に到達して歩兵を届けるという役割をしているんですよ」

矢野（一）「色んな戦い方があると思うんですけども、ウクライナで通用しているから、こ

この戦場でも通用するなんていう考えは、捨てておいた方がいいです」

水島「まあ、そりゃそうだね」

矢野（一）「はい」

矢野（義）「いやいや、いや、今ね…」

矢野（一）「いや、ネットワークが生きられる環境なのか、それともズタズタに遮断される環境なのかという話になると、全く違って来る訳ですよ」

水島「まあ、そうだね」

矢野（一）「ネットワークがズタズタにやられたら、無人機なんか何の役に立ちませんよ」

水島「いや、だから、結局…」

矢野（一）「自立性が無いだけに」

用田「こっちが出来るから、こっちが全部、要らないという話にはならないという」

矢野（一）「そうです、そうです。一つの…」

矢野（義）「光ファイバーで操縦しながら戦っていますよ。うん、臨機応変で」

矢野（一）「一つの兵種で、これが有効だから何処の戦場でも有効なんだっていう考えは捨てた方がいいと」

用田「それはそう」

矢野（一）「違うと」

用田「それは、そう」

水島「ケースバイケースでね」

矢野（一）「衛星が使えない場合だってある。そうしたら、どうするんだと」

用田「それと、我々だって衛星を馬鹿にしているとか、しているじゃない」

水島「いや、まあ、それは、まあ、具体的な事だから（苦笑）」

山下「バランスです。バランスです」

水島「そうですね。」

山下「バランスが崩れると、そこが弱点になる」

矢野（一）「そうそう、そうそう」

山下「バランスが必要ですよ」

水島「はい。そういうことで、じゃあ、いいですか」

矢野（義）「戦闘シミュレーションを徹底的にやればいいんですよ」

水島「そうだね」

矢野（義）「スーパーコンピュータで」

水島「それは、ちょっと、やりたいですね」

矢野（義）「そうすると、どういう兵器が必要なのか判る」

水島「A Iとか、何か、こういうのをやるとね…」

矢野（義）「オペレーターとかA Iが入る、主力の兵器はA Iですよ」

矢野（一）「A Iで一つ、ものが言いたいんですけど、A Iが人を殺す、自立性致死兵器と言いますが、日本は、これを駄目だと言っている訳ですね。はっきりと法律では決まっていませんけど。しかしながら列国は、もう…」

矢野（義）「やっている、やっている」

矢野（一）「こっちに走っている訳ですよ」

水島「そうです」

矢野（一）「人間の判断よりも早く人を殺す兵器と、人間の判断で人を殺す兵器で戦ったら、A Iの方が勝つに決まっているんですよ」

水島「そうです」

矢野（一）「そうすると、これを持っていなかったら、次に犠牲になるのは自衛隊員ですよ」

水島「そうですよ」

矢野（一）「最後に犠牲になるのは、自衛隊員が守れなかった国民ですよ」

シュラー「うん」

矢野（一）「そこらを考えて兵器の禁止条約だとか、あれに入っているんだろうなと」

水島「まあ、地雷なんて最低ですよ、これね」

矢野（一）「そうです。それと、私は、ずうっと言っていますけど、クラスター弾ほど有効なものはないんだと。着上陸侵攻阻止だって何だって。ただ人道の為に捨てた。えっ、北朝鮮、中国、ロシア、どこが捨てたよと。みんな、あんな条約には見向きもしないじゃないか」

水島「そうですよ」

矢野（一）「地雷を人道的に捨てたというポーランドやリトアニアは慌てて、あの条約から離脱してと」

水島「そうだね」

矢野（一）「少しは政治家にも、戦略という頭を持ってくれと言いたいですよ」

水島「だから本当に、その頭の政治家が今、日本を牛耳っているんで、非常に拙いと思うんですけど、では、山口さん、お願いします」

山口「皆さんが退官したあとも、自分の出身のセクションを愛して…」

一同「(笑)」

山口「背負っていることが、よく解って、今日は、非常に楽しく聞かせて戴いて、石破とか言わないでいいだけで本当にいいですよ。それで東アジアっていうことなので、私の立場で言うと、私は去年から今年にかけて、私も4回かな、台湾に行ったんですけど、軍事的な話は、もう山下先生のおっしゃることを、なるほどと拝聴したんですが、日本と大きな違いは、台湾の一般の人の国を守るという意識の高さ」

水島「うん」

山口「これは本当に何て言うかなあ、学ばなきゃいけないなあと思って。例えばタクシーに乗っていても、或いは、一般の大学教授とかでも軍事の専門じゃない人でも、例えば、夜、台湾の人は、お酒をいっぱい飲むから、ずうっとダラダラ喋っていると。中国がいつ攻めて来るか判らないのに、よく酒飲んでいられますねって、乾杯に飽きて、ちょっと、喧嘩を売って見たんですね」

水島「うん」

山口「そしたら殆どの人が、みんな、中国は今、台湾を侵略できないと」

水島「うん」

山口「軍事的には無理って専門家じゃない人も言うんですね。えっ、なんでって言ったら揚陸能力が足りないからだってサラッと言うんですよ。だから、それは、まあ、ノルマンディみたいだね、何十万人もじゃなくて、今、2万人ぐらいと言われている揚陸能力では、先程、矢野さんが言っていたような総合戦闘型の侵略は無理」

水島「うん」

山口「だから夜、酒を呑めると言っている。逆に彼らが凄く恐れているのは、非軍事的手法」

水島「ああ」

山口「これは、もう相当、浸透しちゃっているよねって言って、そっちの方が情報戦」

水島「そうですね」

山口「うん。それから政局。台湾政局が荒れているのも、中国の手が入っていますからね。そういう意味では、国を守ろうという意識が、一般の人から上、トップまで、みんなが国を愛して、守ろうと思っている。日本もそうなきやいけないのに、訳の分からない何人か分からない奴が政治家をやっているから、メチャクチャになっちゃっていて、この話をするといライラするからやめますけれども、台湾については、私達が学ぶべきものだろうなと思っていますが、じゃあ、最後に、もうちょっと引いた話をする。トランプ政権というのは、最終的なターゲットは間違いなく中国。

そうすると、今は経済的に締め上げるということで、世界同時相互関税っていうのをやって、世界同時にやったから、多くの日本のメディアが、トランプ政権のエゴイズムとか言っている訳ですけど、ターゲットは間違いなく中国ですからね」

シュラー「うん」

山口「トランプ政権が見ているのは、トランプ政権になる前、バイデン迄のアメリカ政権は、中国共産党とか中国は脅威だと表で言うけど、基本的には、それは見せかけだったんですね」

水島「うん」

山口「例えば新型コロナウイルスの起源、バイデンは全く追求しなかったですね」

水島「そうですね」

山口「あれは共犯だからですよ。要するにジョージ・マーシャルが中国共産党を守り通して、今の体制が出来たように、アメリカのディープステイトっていうのは共産主義を使うんですよ。そういう意味では、中国と民主党とその背後の人達は、中国を使って、或いは組んでいる状態。そうじゃないという初めての政権が、もしかしたら実はトランプ大統領だとすると、彼は徹底的に中国を追い詰めますから、経済的にも」

水島「うん」

山口「このあとは、恐らく一回、関税を下げた次には、非関税障壁へ行くんです。これ、国有企業の扱いとか知的財産とか、TPPの時に中国を排除する為にやっていた議論で、どんどん追い詰めていく。だとすると、東アジアの安全保障という意味では、先程、皆さんがおっしゃったように、習近平の最後っ屁的暴発、これは逆に言うと、もう戦略的に詰めに詰めた結果の台湾侵略とか、尖閣上陸とかじゃなくて、もう窮鼠猫を噛む的なものが起こり兼ねない」

水島「そうですね」

山口「ということは今迄と、それこそ安全保障環境が大変貌した。これはトランプ政権が発足したことによる大変貌だとすると、日本は、もっと自立して自分が守れる体制をつくらなきやいけないということは、もう間違いがない。

それから、もう一つのキーワードがAIですね。先程、冒頭の矢野陸将のお話で、やはり中国が質量ともに非常に戦力を洗練させている。これはAIのジャンルもそうですよ。実はAIのトップランナーは中国だって言われているんですね」

水島「うん」

山口「トランプ政権は、今ある悪いディープステイトによる世界秩序を解体して、新しい世界秩序をAIでつくるって決めていますから」

水島「うん」

山口「最初に汎用人工知能を中国につくられちゃったら、根源的敗北になっちゃうんですね。だから中国を締め上げているんだけど、ワシントンDCをAI開発の首都、世界の首都にするとっている。それはゴールが新しい世界秩序を人工知能で司るんだ。しかもアメリカが主導する民主主義的、戦争を起こさない非共産主義的AGIを創るという目的に

於いて今、全てやっている。

だから中国以外、中東もウクライナも、もう戦争を全部やめなさいという動き方をしていると思うとすると、日本がそのアメリカと、どう寄り添っていくかっていう答は自ずと出て来る。それから東アジアの安全保障環境は、中国の暴発ということに、ほぼ特化して、日本の国防を考えて行かなきゃいけない」

水島「うん」

山口「今迄のように、例えば何十年計画で台湾侵略するつもりで色々やっているんだろうけど、そうやって読める動きじゃない暴発についても、日本は防衛力をあらゆるシナリオ、素地を机の上に乗せて考えて行く必要がある。それこそ今日のテーマである『大變貌説』ですね。安全保障環境の東アジア版だということですから、ただ、先程、矢野さんがおっしゃった、あと山下さんがおっしゃっていた、皆さんが揉めていたドローンの話ですけど、実は台湾の人、或いは、アメリカの人に聞いても、日本はいいねと。そこら中に仕事をしていないゲーマーが居てと」

一同「(笑)」

山口「めちゃめちゃ優秀だって、みんな知っているんですよ。自衛隊とアメリカが以前、そのシミュレーションしたら日本が圧勝したんですよ」

水島「そっちの世界はそうですよ」

山口「だってC I AのドローンってC I Aの本部でやって…」

水島「ああ、それはあるんだね」

山口「例えばソレイマンには爆発って、要するにC I Aの本部でコントロールしたゲームなんですね」

シュラー「うんうん、うん」

山口「日本人が一番、得意だから、これね、僕は矢野陸将の肩を持つ訳じゃないんですが、今、日本はドローンに、より予算をつけて、それこそゲームで遊んでいる若者、今、年寄りもゲームをやりますから、これを組織したら、軍人じゃなくていい訳ですね」

水島「サイバー軍隊になりますよね (笑)」

山口「ドローンのコントロール、ジョイスティックなんかやらしたら、今の子供は凄いですよ」

水島「(笑)」

山口「世界一と言われている」

水島「少年兵だね」

山口「という意味では、日本には色々なチャンスがあるよねと思っています」

矢野（義）「動員できる、でも日本には強制的にやらせるという根拠がないです。憲法以下すぐに主権優先ですから」

山口「でも楽しくやらせればいいじゃないですか (笑)」

水島「楽しく戦争をやろうっていうのは、まあ…」

山下「電波がないですから (苦笑)」

山口「電波が無いねえ、そこら辺の (苦笑)、それはちゃんと整備しなきゃいけないけど、リソースは決して絶望的じゃないです」

矢野（義）「ベースはね」

山口「うん」

矢野（義）「ベースはある、間違いなくある」

山口「という夢のある話を最後にさせて貰いました」

水島「本当は、そういう役人や政治家が居ればいいんですけどね。エルドリッチさん、お

願います」

エルドリッチ「はい。今日は有難うございました」

水島「はい、こちらこそ」

エルドリッチ「山口さんの話とも関係すると思うんですけども、今日のテーマが『変貌する世界の安全保障状況』ですけども、日本がいかに対応すべきなのかという議論は、私から見れば充分に入らなかった気がする」

水島「その通りですね」

エルドリッチ「ちょっと言及はあったんですけども、例えば、自衛官が、特に専門知識のある自衛官が数が足りないとか、マックスさんが徴兵制度の導入を考えないといけないという話だったんですけども、その点について、私は以前に書いた『人口減少と自衛隊』という本があるんですけども、その時、私は多分、憲法の解釈上で、これは難しいだろうと思っていた。

完全に禁止している訳ではないんですけども、もし裁判になったら、多分、そういう結論になる。だけれども、やはり徴兵制を含めて真剣に考えないといけない、もう、そういう時代に完全に入っている。あと、やっぱり自衛隊が、国民から本当の意味で尊敬される、愛される組織にならないといけない」

水島「うん」

エルドリッチ「その中の各組織、教育機関、例えば防大は教育水準で日本の中のトップにしないといけない。そうすると憧れの存在になるとか、だから、今迄のやり方を今、激変する世界に、そういう風に対応しないといけない」

水島「うん」

エルドリッチ「例えば内閣に関しても、私は個人的には好きですけども、現在の防衛大臣は今、3回目。同じ方が3回目になっている。で、それは果たしていいのか。次の世代は、育てていないし、新しい専門知識。例えば山口さんがおっしゃっていた、そのAIとか、そういう学会では、その学際的に言う二つ、三つの分野を混ぜて新しいものが生まれる。

それが必要なんじゃないかなあと考えています。この番組は3時間、4時間になろうとしています、あと1〜2時間ぐらいが必要かなあと考えています」

一同「(笑)」

水島「はい、僕もそう思いますね」

エルドリッチ「そうですね。あと、冒頭で水島社長が沖縄の尖閣の話に触れていたんですけども、丁度、つい最近、また沖縄戦に於いて、日本軍が県民に被害を与えたではないかというような沖縄の酷い偏向報道がある」

水島「はい」

エルドリッチ「また、そういうような正しい歴史観とか、或いは、何か分断工作的なことが、まあ、沖縄のメディア、特に沖縄タイムスがやろうとしている」

水島「うん」

エルドリッチ「これが非常に残念だなあと考えています」

水島「はい」

エルドリッチ「だから今後、そういう問題を取り上げて戴ければと思います。以上です」

水島「有難うございます。今日は、こういう話でエルドリッチさんがおっしゃるように、本当に議論が足りないという風になると思います。いつも、そういうことになるんですけども、私から一つ、これはアリベイさんだったかな。アゼルバイジャンの人が、この間、ゲストに出て2時間ほど一緒に、2回、討論にも出て貰っているんですけど、サロンって

いうところへ出て貰って話をしたんですけど、一番、印象的だったのは、日本の北方領土が返るかっていう問題がありますけど、絶対に返りませんと。ロシアは返すつもりがありませんと。

じゃあ、可能性が出て来るのは何かって言ったら、日本が中国より経済的にも軍事的にも優位になった時、それはソ連のエリツィン時代ですけれども、そのぐらいしか、もうありませんと。失礼な話になるかも知れないってことを言いながら、皆さんは未だ日本は技術やお金があるから、ロシアは技術やお金を出して貰いたいと思っている。安倍さんがやっていたように、シベリア開発とか、そういうのもやりたいと思っていると、プーチンは、それを待っているって。でも全然、違いますと。もう中国に乗り換えましたと。軍事も。

だから日本に関しては、ウクライナ戦争から友好的な態度も一切、執っていない。少なくとも中立とか人道支援程度のことをやればいいけど、この間、海上自衛隊がウクライナと黒海で共同演習をウクライナ軍とやったっていうね、こういうことやロシアの凍結資産3兆円をウクライナにやっている。ウクライナでは半分ぐらい全部、何処かに消えちゃっている。全く国会の議論も無いまま、こういうことをやって、反ロシアをずっと続けている。

何処かで未だロシアは、金が欲しいだろうとか付き合っ貰いたがっているだろう。一切、無いですと。もう、そこは、はっきり言われて、ちょっとショックだったんですけどね。きっとロシアも友好を望んでいるだろうと。でも今回のウクライナ戦争で、ロシアを完全に敵国にしたのは日本だと。日本がロシアの敵国になったんだと。黙っていればいいものを、3兆円もの金を出してウクライナを応援するし、実際は関係無い国ですよ。

こういう言い方をすると、可哀想っていう言い方があると思いますが、今迄、全く関係ない国でしたから、そういうところに3兆円も出して、そして、軍事演習や色んなことをやって敵対的なことをやってきた。経済制裁もやって来た。私は別にロシアの味方をするつもりはないけども、実際問題として、ああいう遥か彼方のウクライナの戦争の中で、我々の国がここまで関わったことは無かったと思います。遥か遠方の戦争に直接、関わって来た。

今、我々が一番、なっているのは孤立です。グローバリズム、悪の枢軸、ヨーロッパ、それから日本、中共、こういったグローバリズムの国だけが今、その中になっている。我々の国の本当の友達は何処に居るんだ。日本は、とくに今、反トランプの反米政権になっていますから。そうするとイギリスとフランスがやると調子に乗って喜んで、NATOのアジア版NATOを創ろうとか見当違いの事を言っている。

こういう中で本当に我々の国が友好的に連帯する国というのが無くなっているんですね。本当に空白地帯に今、皆さんから聞いて気が付いたと思いますけど、我々の国は準備も何も出来ていないまま、反米、そして親中、まあ、親中って言っても向こうは、そう思っていないですけど、議員を送り込むのは、みんな、経団連も議員も中国ばかり。こういうような状態で行っていることは、台湾に対しても裏切っているし、そういう意味では非常にヤバイ、軍事的にも政治的にも孤立した空白地帯になっていると思います。

さっき言ったように、徴兵制も核武装も本当に真面目な防衛論議が出来ていない状態の我々の国というのを、本当に我々はもっと真剣に考えないと、子供達が酷い目に遭う。我々も含めて、こういうような感じが致しました。今日は真剣な議論を色々お話し戴いたと思います。少しはヤバいんじゃないのっていうのを皆さん、感じて戴ければと思います。今日は、皆さん、本当に、どうも有難うございました。以上で終わらせて戴きます」一同「(礼)」

***** お わ り *****